

傳正

奥村五百子



289-0551-4



1200500732285

289
51



始



10/3

423

289
0.557
4



編著

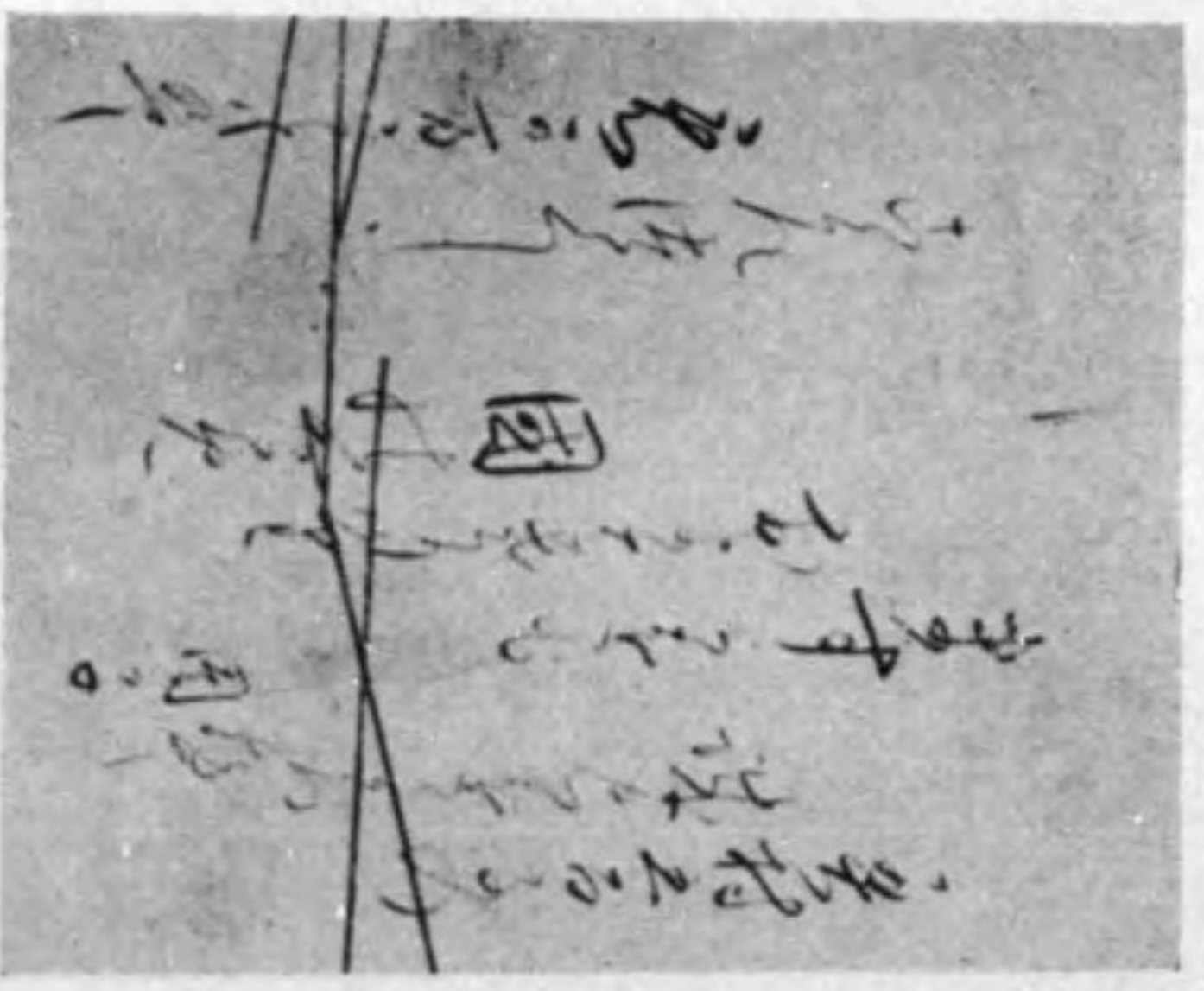
五子

南方出版社刊





閑院宮妃殿下より奥村五百子に賜りし御自詠



付奥リよ下殿子周妃宮見伏東
紙色御るたりは賜に子百五



自刀子百五村奥

簡書のへ子百五村奥リよ者編及師演光谷大・公鷹篤衛近





明治三十四年諸國遊説の途に出立の刀自



滿韓出征軍慰問當時の刀自

小室宗の君の男子が跡手多
給ひと祝い給へりて五年子
上君此の筆を
つぎとせ給へり
あると雄

蹟筆の自刀村奥

公家者男子なる跡手
今う賀おる御
添一が筆
存祝
小室宗の君の男子
奥村圓心

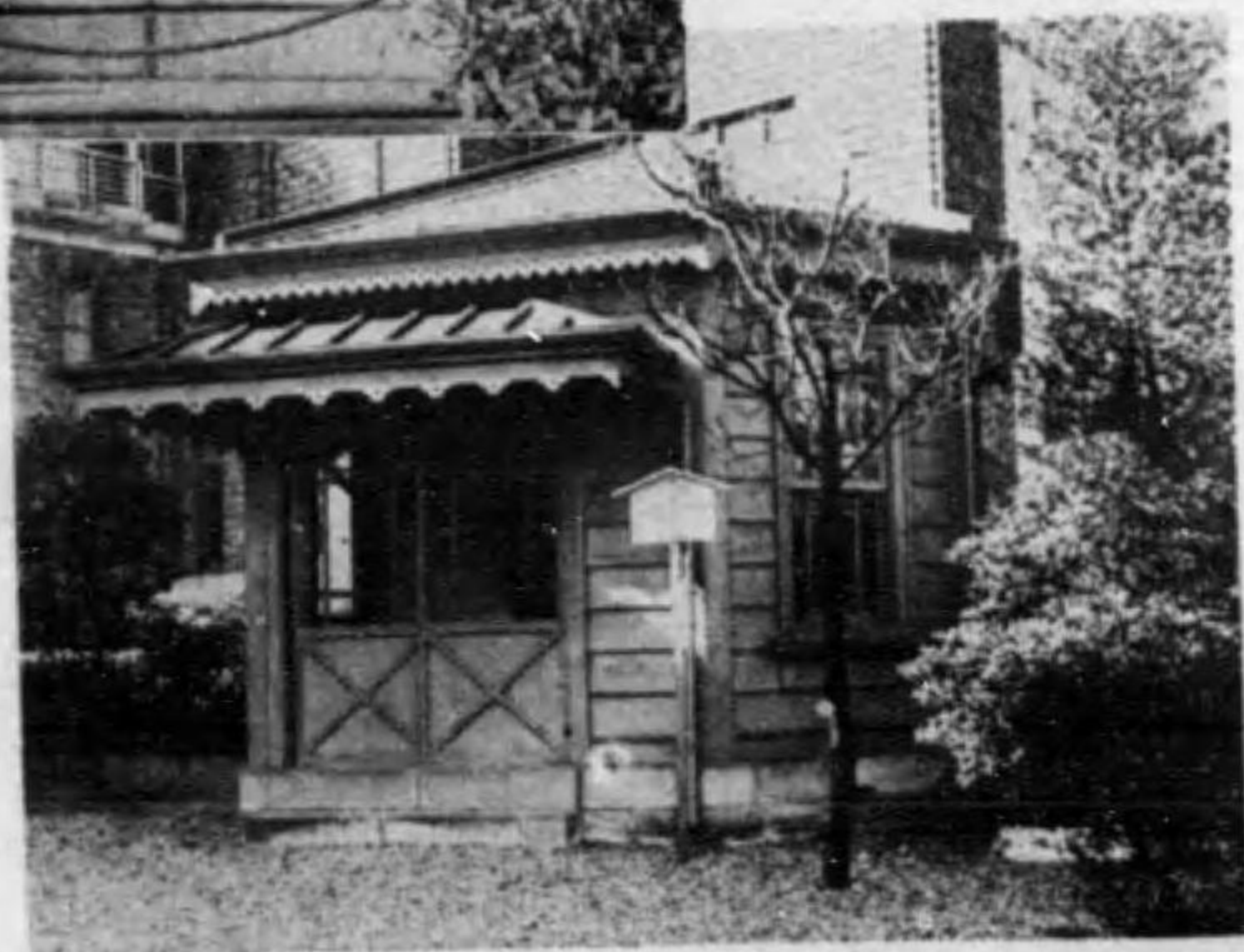
蹟筆の師心圓村奥

一筆の跡手
如公家者なる跡手
御賀おる御
添一が筆
存祝
小室宗の君の男子
奥村圓心

簡書 of 自刀村奥



奥村刀自の銅像
(愛國婦人會本部構内)



愛國婦人會創立當時、刀自
が事務を執られた建物、玉
蓄堂と命名して保存せらる



朝鮮志士尹至冕夫妻と刀自



刀自の起居せられた編者
幡ヶ谷邸内の一室

序

『女子と生れたことを如來様に感謝する』の意氣からして、常式ばなれがしてゐる奥村女史の遠大の理想と、活躍舞臺の廣かつたこと、は之を世界に索めても、あまり類の無い女傑であるのみか、その性格の總てに、『やうで』が付纏つてゐる所が面白い。例へば、がむしやらのやうで志慮が深く、怖いやうで愛嬌が溢れ、頑固のやうで遊藝に富み、粗野のやうで優美に、強情のやうで頗る融通がきくのだから、短見者流には何が何やら一向に解らず、戸惑させられるのである。併し仔細に検査し来ると、其複雑なる性格の裏には、至誠の血が絶えず脈管に漲つてゐるので、其處を攫まば彼女の真相は判る。が、何にして

奥村五百子手握井戸記念碑

海軍中將子爵小笠原長生書

奥村五百子手握井戸の碑
奥村五百子手握井戸の碑は、明治二十六年（一九一三年）に、東京府芝罘区（現港区）に建立された。この碑は、奥村五百子手握井戸の歴史を記し、その意義を伝えるものである。奥村五百子手握井戸は、明治二十六年（一九一三年）に、東京府芝罘区（現港区）に建立された。この碑は、奥村五百子手握井戸の歴史を記し、その意義を伝えるものである。奥村五百子手握井戸は、明治二十六年（一九一三年）に、東京府芝罘区（現港区）に建立された。この碑は、奥村五百子手握井戸の歴史を記し、その意義を伝えるものである。

自刀が朝鮮留滞當時の堀井戸紀念碑
（内境院別寺願本東城京）

も手数のかゝる、執筆者泣かせの存在である。

昭和十六年十二月十八日愛國婦人會主催の
米英打倒決戰體制婦人大會を耳にしつゝ

編 著 者 しるす

正 傳
奥村五百子 目次

奥村精神	……	(三)
血統	……	(一七)
男装女人	……	(三)
南洲と五百子	……	(四一)
再婚婦	……	(五)
この不屈	……	(六一)
五百子の兄	……	(七四)
二つの性格	……	(九〇)
獨進道	……	(九九)
日本村	……	(一三三)

南船北馬	……	(一五三)
第一聲	……	(一六六)
熱誠譜	……	(一七七)
行脚土産	……	(二〇一)
ひたむき奉公	……	(二二一)
結び	……	(二六)

講演

奥村五百子女史を憶ふ	……	(二五)
奥村女史を憶ふ	……	(二六一)

正傳
奥村五百子

奥村女史を偲びて
總裁殿下の御高德に感激す……………(二八三)
奥村愛國婦人會會祖を語る……………(二九五)
家系・年譜……………(三〇九)

五洲 奥村五百子

奥村精神



時局下、臨戦態度の一つとして、愈々婦人團體の新らしい發足を見る事となり、その四十年の古い歴史に終止符を打つた愛國婦人會も、今事變勃發と同時に掲げた——
「兵隊さんは命がけ、私達は糧がけ」

と云ふ幟を捲いて、その新團體の傘下に第一步を踏み出すこととなつた。

だが、會祖奥村五百子女史の精神は、永久に記念すべきだ。

私が、初めて奥村女史にあつたのは、明治二十二年、二十三歳の少尉候補生時代で、軍艦高千穂に乗り修理のため長崎港に入つたのを機會に、郷里を訪問した時の事であつた。

女史は當時四十五歳——

元氣潑刺、談論風發、大いに國家社會を論じてをつた。以來、私も愛國婦人會の相談相手として終始して來たのだ。

愛國婦人會は、明治三十四年、女史が五十七歳のとき、九段の偕行社で發會式を挙げたのであるが、その蔭には何と言つても近衛篤磨公と伊東祐亨大將の力添へが大きかつた。

近衛公の方は知れ渡つてゐるが、伊東大將の事は知らぬ者が多い。伊東大將は、當時海軍々令部長の榮職にあつたが、その力の入れかたは全く大したものであつた。

北清事變の際など、女史が皇軍將士の慰問に出かけて、つぶさに將兵の辛苦を見て、愛國婦人會の設立を胸に秘めて、いよいよ釜山から歸らうとする時、直ぐに船が出ない。そこで碇泊中の軍艦官古に八代大佐を訪づれ、乗船を申込むと斷られた。

ところが、女史は、軍令部長伊東大將の、軍艦にも乗つてよいといふ手紙を持つてゐた。

そして軍艦の上で、水兵を集めて講演をしたのだが、女が軍艦に乗つて水兵に講演をしたといふのは、恐らくこれが初めの終りであらう。

そして、三十四年、愛國婦人會の發會式を舉げてからは、専ら地方遊説に席の温まるのを知

らない有様であつたのだが、三十九年、六十二歳で引退するまでの其の働きといふものは、實に素晴らしいもので、日露戰役には、戦地に大山元帥を訪づれ、また東郷大將にも會つてゐる。全く、その活躍舞臺の廣かつたことと抱負經綸の雄大なことに至つては、日本といはず世界にもあまり類のない女傑であつた。

女史が引退したのは、三十九年で、その送別會も、發會式を挙げた偕行社であつた。その時は、總裁殿下を始め奉り、高貴の方々や名將を前にして謠曲の「船辨慶」を謠ひながら仕舞を舞つた。

近衛公から貰つた燃えるやうな緋の襦袢に、伊東軍令部長からの羽二重の袴、二條公からの日の丸の扇子を持ち、私の贈つた懷劍を帯にはさんで、

「功なり名遂けて身退くは……」

と謠ひ謠ひ舞つたのであるが、その時の鮮かな手さばき足さばきの中にも、自ら女らしい優しさが滲み出てをつて、誰にも、

「あの男まさりの女史が——」

と感歎させずには措かなかつたものだ。

女史も感極まつてか、遂に泣き伏して終つた。が、やがてニツコリ笑つて立ち上つたとき場の感激は、今も私の眼底にハッキリ残つてゐる。

二

それから、女史は郷里の唐津に歸つたのであるが、間もなく病を得て、京都の帝大病院に入院され、大谷光演氏等に見まもられて大往生を遂げたのである。

假令、愛國婦人會は解消しても、有志の人々により、奥村精神といはうか、女史の徳を、永久に稱へたいと云ふところから、その形見として、奥村女史顯彰會——といふものが建設されることになつた。

とにかく此の一代の女傑——奥村五百子も、徹見し來ると矢張り女子の本領に立脚した事に間違ひはない。そこにこそ、女史の徳望が永久に光り輝やくのだと思ふ。しかし、世間では可成り女史を變異的な立場から觀察してゐた人々もあるらしかつた。

が——

女子は何處迄も女子なのだ……

どんなに男優りの奥村五百子だからとて、女子に相違ない以上、どこかに其の天分が残つてゐるべき道理だ。いや實のところは、何處かに残つてゐると云ふやうな生優しいものではなく事實、この一面も亦ふんだんに持合してゐたのである。

ただ、それを、彼女一流の積極的に發揮するため、動もすると觀察者の方で戸惑ひさせられ、これは男女両性中いつれに屬すべきかなどと、疑心暗鬼を呼び起しさへするやうな事にもなつて來るのだ。

甚だ以て判断に苦しむ所だが、萬事が男でゆく人の事だ、矢張りその二表現として置けば間違ひはなからう——などと、觀察者の方から色眼鏡で見て、男子張りにして終ふ場合も多かつたやうだし、加之人間といふものは、程度の差こそあれ、誰でも好奇心を有つてをる。それが兎角業わざをしたがつて困る。

全く、女史の噂といへば、やれ！某大臣を叱り飛ばしたの、それ何大將を振伏せたのと、まるで馬琴の書いた傾城水滸傳でも讀むやうだから、好奇心を満足させるには此の上も無からうが、そんな亂暴な振舞ひばかりで、どうして世界第一と云はれる——愛國婦人會が産まれ出る

ものか。

三

私は女史と二十四年も親交を續けたが、唯み合つた數よりも泣かされた數の方が、どれだけ多かつたか分らない。

君國の爲めに泣き、思想界の爲めに泣き、軍人遺族の爲に泣き、孝子節婦の爲めに泣き、二日に一度位泣かぬ事は無かつたらう。此の點から云ふと、女史は大の泣蟲だつた。

九段の偕行社で愛國婦人會の發會式を擧げた際、女史が演壇に立つて始めて軍人遺族救護の必要を叫ぶや、一語は一語よりも切に、其の面上には涙滂沱として聲も次第にかすれて來、終に壇上でオイオイ泣き出して仕舞つたが、之を聴きゐたる島田三郎氏の如き、その席に居たたまらず、別室に駆け込んで泣いた程であつたから、満堂の婦人一人として手巾を眼に當てない者は無かつたのである。

成程女史には、初對面に相手の荒膽を挫いておくと云ふ癖はあつて、それが紛れると嗷鳴り出す事も往々あつたが、それも相手によりけりで、私の母の前に出た時など、長い時間でもチ

ヤンと両手を突いて長まり、そのあまりに慎ましやかな態度に、私は思はず失笑した事さへあつた。さうして母が引込んで仕舞ふと、ヤレヤレと言ひたけに能く腋の下の汗を拭いたものだ。

また拙宅に滞在中など、時によると私の長女を負つて子守唄をうたひながら、庭園をユツタリ、ユツタリと歩いてゐる事も度々あつた。さういふ折などは、女傑とか女丈夫とか云ふ感じは微塵もなく、ただ一個の善良な老婢を見るやうな氣持がした。

なんにしても女史は、酸いも甘いも噛分けてゐて、人情の機微を捉へるに巧な、逆も隅には置けぬ人物で、その企てた諸種の事業が概ね成功したのも、此の呼吸を心得てゐたのが與つて力あつたものと思はれる。

それに、女史は一面又非常に滑稽味にも富んでゐて、座談も大變巧かつた。そのくせ女史は、かやうな女傑にも似ず頗るの下戸で、猪口に一杯も飲むと、眞つ赤になつて呼吸をはづませたものだが、それで又酒席の取廻しなどは實に堂に入つたもので、駆け出しの藝妓など逆も太刀打が出来ない位であつた。さうして興に乗ると、三味も弾けば踊りもをどり、義太夫はござれ端唄はござれ、鏑のある聲は震ひつきたいほどに聽者を魅したもので、私の母などは毎々その註文を出して、有繋の女史を弱らせたものだつた。

ある時、同郷の青年數名と晚餐を共にしてゐるところへ、女史がひよつこりやつて來た。もとより青年達も懇意の間柄なので、小母さん小母さんと歓迎して、談話は一段と花が咲いた。すると一人の青年が、突然、女史に向ひ、

「小母さん！ 小母さんは若い時、えらく艶福に富んでをられたさうぢやが、後學のためお聴かせやらんか」

と正面から無遠慮に切り出したものだ。

すると女史は、さも嬉しさうにニコニコして、

「あまり多くて、どうもかうもならんが、それなら一つ、失戀ちうのを聴かさうたい」

と眞顔で言つた。

この——失戀といふ題名だけで、一座は早くもどつと湧いた。さうして聴き得た其の大略は斯ういふのだ。

年代は確と記憶しないが、なんでも女史が二十年前後の頃らしい。

藩中に某と云ふ白哲長身の美丈夫がゐた。彼は武術にかけても滅多に後れを取らぬ程の勇士であつたから、言はば虎に翼を添へたやうなもので、吃でこそあれ一藩の娘達が憧憬的であ

つたのだ。

いくら男装して高杉晋作と激論をやつたり、南洲翁と問答したりする女史でも、女子は女子だ。何時の間にか此の美丈夫を慕ふやうになつたから妙ではないか。いや、實のところは妙でもなんでもないので、女史にも此の美丈夫を慕ふても不釣合で無いと云ふだけの自信があつたからだ。その證據に次のやうな話がある。

昭和四年の十一月、帝劇で私の談話を東京日日新聞の小野賢一郎氏が脚色して「奥村五百子」として上演した時、梅幸丈が女史に扮して大評判を取つた。その時、それを見物した唐津銀行の頭取大島小太郎氏が、観劇の翌日、わざわざ私を訪ふて、

「役者と云ふものは、器用なものでござりますな。どうしてあんなに、奥村に似せ得られるのでせう。まるで奥村が出て來たとしか思はれませぬ。さうして聲まで、そっくりでした」と甚く感心して言つてゐた。

なるほど、さういはれると聲まで似てゐたやうなので、容貌が似ると聲まで似るものかと私も不思議でならなかつた。

このやうに、美貌を以て梨園社會に鳴る梅幸丈が扮して似てゐるとすれば、女史の容貌が調

ふてゐた事を裏書するに充分ではないか。……

で、話を元に戻して――

女史は日に増し、戀々の情に堪へず、到頭相手を捉へて打つけに、その切なる思ひを嘯々と撮き口説いたと思召せ。

するとどうだらう――相手は右手を鼻の先へもつて来て劇しく打ち振り、吃る口をモゴモゴさせてゐたが、やがて、トンキョーな聲を出して、

「まッ、まッ、まッびら」
と、やつたさうな。

その様子が、あまり可笑しかつたので、女史は、つひ戀も何も打忘れて、思はずブツと吹き出して終つたと云ふ。で此の戀愛亂離骨灰！

聽いてゐる青年達喜ぶまいことか、腹を抱へて動揺めき渡つたが、私は其の話の巧さにつくづく感心させられ、これも女史が成功の一秘訣だなアと泌々思つた事であつた。

が、それはとにかく、私が返す返すも敬服してゐるのは、女史の熱烈な信仰である。一體女傑などといはれる婦人には、動もすると品行が修まらなかつたり、相當慾も深い者が多かつた

やうだが、女史の身を持つることの堅固なのと、どこどこまでも清廉潔白であつた事は何とも言ひやうがない。

あの命がけで作り上げた愛國婦人會でさへも、最早や隠退の時期だと考へると、飄然去つて片言隻語も未練がましいことを口にしなかつたでは無いか。攻撃されようが罵詈雑言されようが、しがみついても其の位置を去るまいとするのは未だしも、之を悪用して種々な醜い問題を惹起してゐる世の名士？連があるとしたら、さういふ方々に、せめて女史の髪の毛一本づつでも謹呈したいやうな氣がしてならない。

四

それはとにかく、この女史の高邁な氣節も、其の根元は純なる信仰から發してゐる事を思ふ時、全く私は何時でも敬虔の念に打たれざるを得ないのである。

抑々女史の尊奉してゐた眞宗は、純他力の教理に立つてゐるので、厭離穢土、欣求淨土を標榜する關係上、反對派からはともすると、消極的な教へで進取の氣性を失はしめると攻撃されるのだが、女史の活躍は、まんまと之を裏切つて、進取となり退守となるのは、皆信徒の覺悟

如何に由るのだといふ事を、最も力強く證據立ててゐる。

女史の信仰は、所謂入我、我入で、如來と一如し、その居るところ即淨土となつて功德の大寶に取圍まれてゐるのだもの……、何を苦しんで現世の地位や財寶などに執着を有たう。

女史は常に如來同居してゐる事を確信し、その心眼には絶えず白毫の先を仰いでゐたからこそ、

「五百は何處で死んでも、如來様が引取つて下さるから、安心して、お國の爲めに働くのさ」と、目を細くして法悦に浸つてゐられたのである。

又こんな事も口癖のやうに云ふてゐた。

「男と云ふものは、悪いこと許りしたがつて何うもならん。五百は女子に生れさせて戴いたのを、如來様にお禮申してをります」

言やや奇矯に過ぐるの感はあるが、私はさう言はれる度に、忸怩たらざるを得なかつたものだ。

男は悪い事をしたがる――

なんと云ふ皮肉な警告であらう。洵に女子の爲めに萬丈の氣を吐いてゐると同時に、女史が、

女性たるに満足――寧ろ誇りを感じてゐるの確たる證左ではないか。

女史逝いて三十五年、一意國家を念としてゐる此の不滅の精魂は、今どんな眼をして此の戦時下の世相を觀てるやう……

血統 (一)

愛國婦人會の生みの母、奥村五百子女史は弘化二年五月三日、肥前唐津の城下、釜山海高德寺の十二世、奥村了寛法師の一女として同寺に呱呱の聲を上げたのである。

母は山田浅子。

兄は圓心師。

女史は六歳の頃、軽い天然痘の爲めに天性の美貌を聊か奪はれたが、天稟の姿態の優雅さは時に熱血的な彼女の言動にも拘らず、決して毀損されてはゐなかつた。

當時、一般庶民の學問は勿論盛んでなかつた。殊に女子は、ただ良家の子女だけが、それも心ある親達の進めによつて、家事のひまひまに、家庭で手習をさせ女大學を讀ませてゐる位に過ぎなかつた。

だが、女史は、七歳の時、唐津大明神の社司戸川惟成の門に入つて、讀書や習字を初めたのである。

これは偏に勤王僧たる父了寛法師の賜物といふべく、女史の大成は、ここに其の第一歩を踏み出したと言つてよいだらう。勿論、天賦の英才や、常人と異なつた其の熱血性を見のがすわけにはいかない。

だが結局するところ、それだとして、この父、この母——を有つた彼女の幸福といはねばならぬ。

長ずるにつれて、女史は何かと其の非凡の氣象を顯はし、時々、世人を、あつと驚かすやうな事をしたたり、又大いに困らせたりする事があつた。

丁度、戸川塾に通つてゐる頃のことだ。かういふ事柄は、今でもよくある事だが——その頃藩中の腕白共が、よく女兒の通學をまつて、いろいろな悪戯をして困らしてゐた。

その腕白兒の一人が、ある日、唐津大明神の庭前の大椽に攀ぢ登つて、夢中に椽の實をとつてゐた。

それを見つけた五百子は、かねての噂を聞き知つてゐたので、けふこそ其の敵を取つてやらねばと、早速、長い竹竿を持ち出して來ると、下から盛んに腕白兒の足を突つき廻した。さすがの腕白兒も、これにはたうとう悲鳴を上げて詫びねばならない羽目になつて終つた。

そこで五百子が、

「よし！そんなに謝るなら、許してやるが、本當に、これからは、皆に、もう悪戯をしないか！大變な權幕なのだ。

腕白兒は半泣きで、

「本當にせん、せんから、下してくれ」

五百子は、しかし、尙も強く戒しめてから下りるのを許してやつたといふ。

ところが、あとで此の事を聞いた戸川先生が、五百子を呼びつけ、

「お前のけふのやり方は女の兒には、ふさはしくない振舞ひだ。さう思はぬか。女は女らしく優しくないといかぬものぢや。どうだ、さう思はぬか……」

と淳々として諭された。

しかし、勝氣な五百子は、大變不満で反問するのだつた。

「あの男の兒は、これまで、なんどもなんども、私達女の子に、悪戯をしてをるんです。弱い女だと思つて、苛めてをるんです。そんな悪い事を、する奴を、膺懲めるのが、なんで悪いのでせうか」

戸川先生は、五百子の氣性を知つてゐるので、言葉を和らけると、

「弱い者苛めをする、そんな男の兒には、今後女の兒に悪戯をせぬやう、わしから堅く申付け
る。しかし、女はまた女として、矢張り優しうなうてはならぬのだ、なア」

こんな風に尙も五百子の腹に入るやう戒められた。

ところが、五百子は、あとで此の事を友達へ審さに物語つて、かういつたといふ事だ。

「女は、女らしくするために、悪い事を見遁さねばならぬのなら、私は、女になるのは嫌いよ」
そして、その友達から、

「それでも、矢張り、あんたも女は女や」

とて、笑はれたさうである。

双葉にて香ばしい梅檀は矢張り梅檀である。五百子は既に、こんな少女時代から強い正義感
を、その胸奥深くに藏してゐたのである。

血 統 (二)

その天性の負けぬ氣故もあつて、幼い頃から不絶正義感を胸に燃え立たせてゐたやうな熱血
少女、奥村五百子にも、矢張り女の子としての優雅さはあつたのだ。

彼女は、舞踊、音楽といふやうな女の子らしい趣味に少なからぬ興味を有つてゐた。殊に三
味線の稽古と來ては、子供とも思へぬ激しい勵みかたで、十二三の頃には、もう城下の評判者
となつてゐた位である。

これは、やさしく且つ堅實な家庭の主婦たる母の浅子の感化によるところも多いであらう。

浅子は、唐津藩士山田圓太夫の娘である。公卿出身で人に施すことの好きな上に、傑れたる
勤王僧として世に認められるた良人了寛の爲めに、彼女は、不絶食客の多い苦しい此の貧乏寺
——高德寺の内政を立派に處理してゐたのだ。而も檀徒のものからは、又、高德寺の生佛様と
噂される位に親しまれ懐かされてゐたのである。如何に彼女が、苦しい中にも人に親切であ
つたかが、これでよく分ると思ふ。實際、浅子は餘程のシツカリ者だつたらしい。

何しろ、良人の了寛と來たら、手元に物が無いとわざわざ買つて來てまで人に振舞つてゐたさうな。そして毎日晚餐の時などは四五人の客が缺けた事のないといふ有様だつた。

「買つて食はせる高德寺」

當時、唐津城下にこんな流行言葉があつた位だ。

編者は、ここで少しく、奥村五百子女史の父について、書いて置く必要を感じる。

父了寛は、左大臣二條治孝卿の三男寛齋の子で、幼名を増千代といつた。了寛は文政七年、年齢僅かに九歳の時、松浪諸太夫の養子となつて、更に松浪家から高德寺に養子として迎へられたのだつた。

何故、左大臣の孫である増千代君が田舎の貧乏寺へ養子となつたかについては、こんなわけがある。

當時、徳川幕府の公家に對する態度には、表面は可成り尊崇したやうに見せて、裏面では之を抑壓仕様といふ遣り方であつた。従つて公卿は空名を擁して其の日の生活にも事缺くと言つた事柄が多かつた。だから二男三男に生れた者は、いろいろの縁故を頼つては、それぞれの生活の爲めに地方へ轉出したものであつた。

そのくせ、幕府ではかうした公卿と諸侯の交際を又極度に警戒したのである。で諸侯が公卿の子弟を養子として迎へることは大變むづかしくて、實際問題としては寧ろ不可能な事だつた。だから、公卿の次男以下は、百姓や町人の列に下るのも不見識であり、せめては僧侶にもなるのが、彼等としては唯一の逃避策だつたのである。

これで、左大臣の孫増千代の高德寺養子問題についても分明する事が出來やう。

さて、この幼ない公達増千代が、肥前唐津に入つた、その下向の道中を記すと——一行は、老女でもあり生母でもある歌浦を始めとして、侍女や醫者まで加へた都合十數人の、槍、薙刀、挾箱等の道具を飾り立てた華やかな行列で、筑前前原を経て對州領濱崎に入り、此處の庄屋市丸某方に一泊して此處から虹の松原を経て唐津入りをしたのであつた。

その時、増千代は眉黛を畫いて濃紫の義經袴といふ愛くるしい扮装だつたといふ。この華やかな一行、この若い公達！

だから行き交りに出遇つた民衆は皆驚異の目をもつて迎へた。そして忽ち此の公達を拜しようとて遠近から高德寺に押し寄せてくる有様。

しかし、當時の高徳寺は全く貧乏の極であつた。屋根は落ち壁は破れ、實に目もあてられぬ

廢寺同様の姿だつたのだ。増千代が元來貧しい高德寺の養子となつて迎へられたのも、畢竟、この寺の運命を挽回する爲めに外ならなかつた。

で、先づ修理の出來上るまで増千代は、唐津在井手野村の庄屋松尾直太郎宅に暫時の假住居をしてゐた。そして修理がなつて高德寺に移つてからも、初めのほどは僧籍に入らず、表面は松浪諸太夫の養子となつてゐたけれども、實は二條家の公達なので、皆は公様と呼んで一般の尊敬は厚かつた。

血 統 (三)

この幼い公達増千代が愈々僧籍に入つたのは、天保四年、彼が十八歳の時で、その時始めて願乘院了寛といつたのである。

が——

年齒も行かぬ増千代君、子供心に生活問題や父上の深慮など分らう筈もなく、又生みの母たる歌浦の心からなる撫育などより、都への愛着が相當強かつたと見えて、十二歳の春には、高

徳寺を抜け出したといふ事件もある。

その時、彼は虹の松原を東に、最初唐津へ入つた時に一泊した縁りを求めて、哀れにも濱崎の庄屋市丸の宅に辿りついたのでつた。

市丸夫婦は、それと知ると様々に勞はりため置きながら、一方急使を出して高德寺へ知らせた。

寺では、それ大變といふので直ぐさま迎へをやつて、いろいろと宥めすかした上、やつと歸還を請ふて事なきを得たといふのだ。

かうして次第に成長するに従ひ、増千代は我儘も募り、悪戯も甚だしくなつて、寺の内外は共に随分手古摺らされた事もあるらしい。

ある時は、西の濱（唐津市の海岸）で、藩主が地引網を見物してゐるところへ、増千代が飄然と現はれ、藩臣が傍へよせつけまいとするのもきかず、

「麻呂は二條増千代ぢや」

とて、何を憚る事もなく、浪打際に戯れ出したので、藩主が之を知つて、自分から引上げたといふ話もある。

又、時々、藩主の町内通行の警蹕の聲が聞えると、増千代は練堀に攀ち登り悠然上から見下しながら他愛ない事を言つて打ち興じたりする事もあるので、大變藩臣達が氣をもんだといふ。

奥村五百子女史のあの負けぬ魂は、先づかういふ父の血統と見てよいだらう。そして、談論風發、時には男以上の男性的行爲を敢てした女史の反面にも、女らしい優雅さのうかがはれてゐた一面は、母淺子の血といふべきだ。

ところで、父了寛が僧籍に入つた天保四年頃といふと、この時代は、徳川幕府の基礎がやうやく動搖したした頃である。即ち其の八年には大鹽平八郎の亂が起つてゐるし、翌九年には、老中水野忠邦の大改革が失敗に終つて、天下は愈々多事となつてゐる。のみならず、外國船の渡來してくるものが次第に繁くなり、世を擧げて、

「開港か攘夷か——」

と云ふ議論が喧しくなり、一方では、尊皇の大義が高調せられて、志士の公卿の門を敲く者も段々が増えて行つたのであつた。

年壯氣鋭の了寛——

殊には、かうした事情で高德寺の住職となり、僧籍に入つた十八の年からといふものは、一人の教師がつききりで學問に勵み、京都へも度々往復して、宗教上の修行も中々積んで來た人だ。

「皇室のために——」

と云ふ情熱は、どうして彼を安閑とさせてゐる事が出來よう……！

しかも、彼の生家は五攝家の一であり、その寺——高德寺は、遠く慶長の頃から海外發展の大使命の下に創建されてゐるのである。

彼は自分が僧籍にあるのを幸ひ、茶の湯や圍碁に托して上下と交り、或ひは施與を装ふて志士を懐け、或ひは法話に名を借りて内外の大勢を説き、烈々火のやうな愛國の眞情を其の胸奥深くに藏しながら専ら天下の風雲を觀望してゐた。

しかし、そんな事とは知らない地方の民衆は、單純に高德寺様といへば、無慾恬淡、ただ恵みの好きな癩癖の強いお坊様だといふ風にしか觀てゐなかつたらしい。實際、癩癖の強いお坊様と見てゐた理由の一つとして、こんな話がある。

ある日、村の一人が、煙草を吸ひながら、墓石の上へ吸殻を叩き落してゐるのを目にした了

寛法師、即座に、つかつかと其の男の側へ駆けつけるなり、

「そんなことをするのは、死んだ者の靈を辱めるもんだ」

と、いきなり其の男を引ツ張つて来て、頭の上へ大きな吸殻を叩き落して、その無禮を戒めたといふ話がある。

「買って食はせる高德寺様」といふ慈悲の一面に又、

「高德寺様のお眼玉」

といふ名の起つてゐたのも、ここらに大いにその理由があるのである。

また或る時、京都からの歸途、旅費に窮して黒田侯の邸に乗り込み、その借金を申込んだ。

黒田家では其の家格をかねて承知してゐた事とて、さつそく金子を杉盛に三寶へ積んで差出した。すると、

「辱けない、頂戴して参る」

と、ただの三兩だけを、その杉盛の中からとつて、さつさと引擧げたといふ事だ。

また、寒風膚をつんざくある冬の朝の事である――

門前で一人の乞食が震えてゐるのを見ると、自分の羽織を脱いで與へた。夫人がそれを見て

直ぐに、

「何か外のものを、おつかはし下さいますまいか。それをやつて終ふと、もう羽織はございませぬから……」

と哀願的に注意をした。すると、

「わしは、家の中にある故、羽織は無くとも凌げる。可哀想に、この寒さに震えてゐるぢや」と、平氣なものだつたといふ。

實に、この一事などは面白い話で、明治の初期、京都伏見の黄檗山の管長虎林和尚が、通りすがりに橋の下の乞食に、自分の綿入を帯で吊して與へ、乞食が禮をいはなかつたのに腹を立てて、

「こら、御禮をいはぬのか」

と詰問して、却つて、その乞食から、

「御禮をいはす位なら、くれない方がよい」

と逆手に出られ、そのまま引擧げたといふ話などにひきくらべて、一層愉快に思はれる。

流星は公達の出身であると沁々考へられる。勿論、公達や貴族の出でなくとも、又これ以上

に恵みの深い人々も広い世間には澤山ある事であるが、しかし、われわれ凡夫のあさましさは、常に環境に支配されるといふ事——即ち、氏より育つ三吉さんといふ言葉の通り、卑淺の出身で、尙且つ恵みの深い人、又は大様な人といふやうな者は、さう世間にはザラにあるものではないだらう。そんな人は天才か、英才か、いづれにしても普通ではないだらう。

奥村五百子——如何に大英才であつたとしても、かういふ父了寛の娘でなかつたならば、あれほどの大生涯は全う出来なかつたらうと思ふ。

男装女人 (一)

元治元年五月二十一日、五百子が父了寛の命を受けて、可弱い女人の身に、義経袴に草鞋ばかり深編笠、腰には朱鞘の大小といふ扮装で、唐津から長州へ旅立つた話は、五百子の生涯中で最も有名な話であるが、その時、五百子は十九歳。父了寛が四十五歳。

その用件といふのは、五百子にとつて叔父にあたる長州侯の家老宍戸禮元の許へ、父了寛から勤皇の爲めに長州侯を動かす、同志の爲めに是非熟考してくれといふ依頼の手紙を持参する事だつた。

當時、長州では男子の出入を嚴禁してゐたので、五百子選ばれたわけである。何しろ文久三年の夏頃から僅か一二年の間に、大和十津川の變、長州のアメリカ軍艦砲撃騒ぎ、三條公以下七卿落ち——といふ風に、天下は物情騒然たる有様だ。

了寛は娘五百の氣性をよく知つてゐるからこそ、この大役を仰せつけたのだ。

父は、娘を自室へ呼ぶと、嚴重に言つた。

「五百子、長州は今、男の出入を禁じてをる時ぢや。それで圓心（五百子の兄）を遣はす事が出来ないのだが、そちは女故、どうぢや、宍戸家まで、わしの使に行つてくれないか——」
「はい、どこへでも参ります」

「さうか、……宍戸家迄行つて、この手紙を叔母に、渡してくればよいのぢや」

了寛は、かねて認めてゐた手紙を、その時始めて五百子に見せたのだ。手紙を讀み了つた五百子は、勤皇の爲め、同志の爲めとあつては、勿論買つて出ても行きたいところだ。

「父上、御安心下さい。五百必ず、御用相果します」

そんなわけで、その翌る日、弦月暗い丑の下刻に、五百子は一人の従者を連れて高德寺を出發したのだつた。

いよいよ門を出る時、了寛は五百子呼びとめて、

「五百、いよいよ皇國のために、父がそちの命を貰ふ時が、來たかも知れぬぞ」

と、キツパリと言ひ放つてゐた。

「嬉しう存じます。私の一命が無くなるやうな事がありましたら、日本中の心ある女の胸へ、正しい明るい火と點することとなりませう。有りがたいお役目でございます」

五百子の答へも、キツパリしてゐた。

「それを聞いて、父は安心した。必らず、斬られるやうなことがあつても、痛いなどと音を上けては、相成らぬぞ」

「はい、息が絶えまして——」

途中、五百子は小倉の番所を首尾よく通過し、一艘の小舟を雇つて對岸に渡り、ここで従者とも別れて、それから一人で馬關に向つたのだ。

龜山八幡の關へ差しかかると、警固の武士達は忽ち八方から拔身の槍を擬して、五百子を取り圍んだ。

そこは、馬關の奇兵隊の本陣だ。

左右に幔幕、旗差物、鐵砲、槍などが飾つてある。蘭陵王の面に似たいかめしい面が、玄關入口の左右の柱にかかつてゐる。すぐ向ふには一門の大砲すら見えて、馬の嘶きがただならぬ雰圍氣を讓してゐる。兵の號令も聞えてくる。所謂當時に新式の訓練が始められた證據だ。

頻繁に出入する兵士の刀の柄には、みな白木綿が巻いてある。それを背負つてゐるもの腰にさしたものの様々だ。そして主だつたものは皆小具足をつけてゐる。如何にも物々しい風情だ。

何しろ、英、佛、米、蘭の諸國の軍艦が、いつなるとき馬關を砲撃するか分らないといふ時だ。市中に漲つてゐる殺氣は又夥しいものがある。

そんな最中へ、突然、深編笠に義経袴といふ旅人が踏み込んで來たのだから堪らない。

鐵砲もつた番兵が、最初に、さういふ五百子を見つけて、サツと陣所に駈けつけたのだ。

どやどやつと、七、八名の兵士が門のところへ馳け出して來た、彼女を取り圍んだのに不思議はない。

兵達は、勿論舉動不審と見て、いきなり槍を彼女に突きつけるや、

「何者ぢや——」

「不審な奴——」

「笠をとれ——」

名々が叫んでゐた。

そこで素直に笠をとつた五百子は、ニツコリ笑ふと言つた。

「長州の武士は、臆病ぢやなあ、可弱い女子が、そんなに怖いのか」

五百子は、さういつて、朗らかに、高らかに笑つたといふ。

これは、後日、その時の光景を目にしてゐた長州の某人から聞いた事だ。

兵達は、異口同音に、

「何、女子!」

と叫んでゐたさうだ。そして、一人が直ぐ又、

「女子のくせに、何必要あつて、男の姿をしてをるか」

と訊いた。

皆は愈々怪しいと思つたのである。

「貴藩では、男子は、御通しなさらぬと承つた故、女の私が、男子に代つて、参つたのです」

「何用あつて、何處へ参る?」

「當藩兵戸家へ用あつて参る者——」

「如何なる用ぢや」

「そなた達に、話すわけには参らぬ。御通し下さい」

「わけが分らぬ以上、通す事ならぬ」

「それでは、唐津藩の奥村了寛の娘五百が、宍戸家へ用あつて参つてみると、先方へお知らせ願ひます」

が、やがて小具足の一人が、

「宍戸家へ用ある女が、何故、男装などして来た？」

「それは前にも言つた事、御藩では、男の出入嚴禁ではないか」

男装女人 (二)

五百子は、いきなりツカツカつと土足のまま陣所の上つて床几にとつかと腰を下した。そして、警固の者達が啞然としてゐるのを尻目に、

「男のくせに、うるさい事をいふ人ばかりぢや——それほど疑はしいのなら、とにかく一先つ花ノ町の島右衛門と申す問屋へ下がらして下さい。此の家は、私の父が、往復共の常宿でございますから。その上、宍戸家へ御問ひ合せなさつてはどうでせう」

警固の者達は、不審ながらも此の五百子の不敵の振舞ひに、スツカリ度膽を抜かれた形で、

何か頻りにボソボソと和語り交してゐたが、と、そこへ二三の従者を連れて、イガ栗頭の武士が陣所を見廻りにやつて来た。警固の士は、急に威儀を正して挨拶した。これこそ長藩隨一の人物、奇兵隊長高杉晋作であつた。

五百子は一目で、それと分つたと見えて、いきなりツカツカと其の側に寄つて、

「高杉先生！ お懐かしう御座います」

「えッお身は何誰ぢや？ 俺は高杉ぢやが……」

「ハイ唐津高德寺奥村了寛の娘五百に御座ります」

「ホウ奥村氏の娘御か、確か御家老とは親戚ぢやつたな、……よいよい、誰か直ぐ御家老の屋敷へ使を出しなさい。そして、お迎へのある迄この娘御を何處かへ御案内するのぢや……俺は忙しい。これで失禮しますぞ！」

高杉は風のやうに去つて行つた。

熱血兒高杉と五百子の初対面はかくも劇的に終始してゐる。

それから間もなく、五百子は槍の衆二人に護送されて、島右衛門問屋に到着した。

問屋の主人は、つらつらと五百子を凝視めてゐたが、ハツと膝を打つと、

「おお！お嬢様、お嬢だ——えらい風をして御越しなされましたなあ」

と、懇懇に五百子へ一禮し、すぐ、槍の衆に向つて言つた。

「このお方は、たしかに御家老宍戸様の御因戚、高德寺のお嬢様、それに相違はございませんぬ。島右衛門、しかと、お預り申しました」

實は、數年前大阪行の時、ここに碇泊したので、五百子は此の家へ宿つた事があつたのである。

宍戸家の縁者と聞いて、槍の衆は當惑した顔で、コソコソと遁れるやうに其處を引擧げて行くのであつた。

後年、女史が此の時のことを物語る度に、よくかうつけ加へてゐた。

「可弱い女の身で、これだけ國事に奔走してゐる心も分らず、御役目、御役目で、咎め立てばかりする警固の人々が、あの時は、實さい腹が立つた。しかし、これも若氣の至りからなのですなあ」

と——

さて五百子は、この島右衛門宅で、手紙を認めて、宍戸家へ通過許可の鑑札と、迎への者を

送られるやうに使者を立てたのだつた。

そして、數日後に、馬廻りが足輕一人をつれてやつて來たのであるが、その馬廻りは、五百子をジロジロと見廻しながら、かうキリ出したものだと言ふ。

「もし本者なら、連れて來い。しかし偽せ者ならば、即座に斬つて終へ——といふ御言葉で、ございましたが……實は、私は、これまで一度も、あなたを御見知りいたしませぬ故、知りませぬが、まさか、女の身で、左様な偽せ者などといふ、大それた事は、ありますまいなあ」

馬廻りは、餘程判断に苦しんだらしく、それに何かまだ大變な心配事でもある様子で、おそるおそるかう訊いた。

五百子も流石に、その馬廻りの正直さには、心の底から氣の毒になつたといつてゐた。それで、すぐ、安心を與へてやらうと思ひ、

「ここで、どれほど、そなたが私を吟味したところで、今もそなたがいふやうに、私とそなたは、ここで會ふのが初めてのこと——決して眞偽のほどは、分りませぬ。しかし、お邸に連れていつたら直き分ること、それまで、お前が、私の命を預かつてゐたらどうです」と、いつた。

すると馬廻りが又直ぐに困惑の様子でいつた。

「もし間違つてゐたら、拙者に、切腹を申付けるとの仰せで、ござるので——」
で、五百子は、更に、

「この宿の主人も、警固の人達へ間違ひないといふたのです。私をつれて行つて、お前が腹を切る心配はないから、安心して連れて行きなされ」

宿の主人の島右衛門も、大いに證明にとめた。馬廻りも、それでやつと決心がついたらしい。

やがて五百子は、初め来た時のやうに身装を整へると、宿の者に見送られて其の家を立つた。そして途上宍戸家の別邸に少憩して、そこからは駕籠に乗つて本邸に向つた。

當時、宍戸家の夫人は、眼疾の爲め失明してゐたが、五百子の聲で直ぐそれと知り、大いに喜んだ。

「本當に五百さん、よう来た！　だが、如何にお國の爲めとは申しながら、年齒も行かぬ娘御のそなたが、供をもつけずに、よう來られた！——お父様もお父様ぢや、又、お前様もお前様ぢや、まあ、いづれにしても御無事で、何よりであつたなあ」

かう言つて、その大膽さに驚いたといふ。

さて五百子は持参の手紙を渡し、使命の趣を述べると「必ず殿様の方へは申上ぐる事とするから、戦争中の事故長く止まつて居るのは危険である。用が済んだら早々御歸りなさい」と言はれて、歸途は宍戸家から送り届けられ、元治元年八月、丁度外國軍船が馬關砲撃の前晩に、豊前の若松まで歸へり着いた。

南洲と五百子 (一)

五百子が西郷吉之助を初めて知つたのは丁度この頃の事である。

當時、五十二萬石福岡藩に加藤司書徳成といふ傑物がゐた。石は二千八百石、中老の要職にあつた。

元治元年。尾張大納言徳川慶勝公が、三十六藩の大軍を率ひ其の總督となつて、長州征伐の爲め西下した時、加藤司書は黒崎に兵を駐めた。そして、

「濫りに動いてはならぬ」

と云ふ決意を固めると、腹心の徒——眞藤登、神代勝兵衛等他二三人を連れて藝州廣島に潜入し、寶屋といふ旅舎に泊してゐた。

彼は、その頃、福岡藩を代表する勤王黨の巨頭として天下に知られてゐた。曾て勤王論をやつたために流罪となつてゐた中村圓太一派を釋放したのも彼だつたし、薩長の同志とは餘程以前から意を通じてゐた男だ。全く押しも押されぬ勤王派の代表だ。

その加藤が廣島へ潜入したのだ。西郷も殆んど同時に、廣島へやつて來てゐた。

「あんたが見えれば、もう大丈夫——」

と、その時、西郷は司書の手を握つたと傳へられてゐる。それほど加藤司書だつたのだ。

彼の暗中飛躍は目ざましかつた。

彼の目的通り、長州征伐の三十六藩は、遂に防長の圍みを解いて引き揚げる事になつたし、三條公以下の七卿のうち、五卿は、薩摩、肥前、久留米、筑前の五藩が、一人つつ御預かりするといふことに決つた。

この司書の器量は全く大したものので、殊に尾張大納言を説伏した時の謀略辯舌は、實際天下の志士を感奮せしめたものだつたと傳へられてゐる。が、かうした司書の手腕が勤王黨に激賞される反面、佐幕派は幕府の大失態だといふので大いに攻撃し、司書を憎む事も亦ひどかつた。「何事も、お國のためでござす」

西郷は、司書の勞苦に對して、かういつて泣いて喜んだといふ。

尾張大納言は、この時、西郷へ太刀一口、司書へ緋羅紗の陣羽織、紫檀函入三具、黄金三枚を贈つて、彼の勞を犒はれた。しかし、幕府では、大納言の征長軍解散といふ英斷が幕府の威

信にかかはるところから大不服であつた。従つて大納言に對する黒い恐ろしい雲が巻き起りかけた。だが大納言の決意は強かつた。志士の支持も、また中々力強かつた。司書は、この時、寶屋の二階で、この雲行きを觀望してゐたが、大納言の決意強しとみて非常に安心し、大いに同志と歡會痛飲したものだ。

すめら御國のものふは

いかなることをか勤むべき

ただ身にもてるまごころを

君と親とにつくすまで

この歌は、その席上、司書が作つて聲高らかに唄つた歌だ。

翌慶應元年正月四日——

司書は廣島から福岡に歸つたが、その月半には、彼は五藩に預けらるべき五卿を福岡に招いて、太宰府の延壽王院に入れた。こんな事は薩州長州を説伏せねば出来ない事だが、西郷や高

杉晋作や久坂玄瑞等と交りの深かつた司書故、萬事意の通りに運べたのである。

藩主黒田長博は、その功を賞でて司書を家老に進め、財用方元締に重用し、勤王の氣運は頓に藩内に漲つた。が納まらないのは勿論佐幕派の一味だ。

四書（司書）、五經（五卿）を讀み（呼び）て、國に益なし

こんな落首が、福岡や博多の辻々に貼り付けられるやうにさへなつた。藩論は收拾覺束なくなつた。そして二月になると、幕府の空氣は急に硬化し、遂に、

「五卿を直ぐ關東へ護送せよ」

と福岡藩へ嚴命して來た。

で、その月二十四日、太宰府では、西郷を議長として大會議が開かれ、幕府の言ひ分はどこまでもよくない、こんな命令は撤回させろ——といふ話し合ひになつたが、一方、司書が以前に長州へ送つてゐた密書が、幕府の手に押收されたりして、黒田藩は抜きさしならぬ羽目に陥つて終つた。

そこへ、それと相前後して、大目付の塚原但馬守が小倉へやつて來て、勤王派に對する示威運動をやつたり、やがて福岡へ乗り込んで來たりしたものだから、時こそ來れと、藩内の佐幕

派は雀躍ささやりした。

そして、浦上、小川、久野といふやうな家老達が辭表を出すやら、全く福岡藩は勤王と佐幕の正面衝突が豫期された。

そこで司書は已を得ず、三月四日のお雛祭の翌くる日、家老を辭した。これを見た勤王派は、五卿を奉じて義兵を擧げ、一舉に佐幕派を除かうとしたが、これも事前に佐幕派に探知され、同志百四十名が捕へられた。

藩内の形勢は急轉直下した。佐幕派の浦上信濃の暗中飛躍が效を奏したのだ。司書は閉門、一族預けとなつて終つた。他の一味も、それぞれ謹慎、入獄となつた。それが慶應元年秋十月二十三日の事である。

そして、二日後の二十五日の夕刻、司書は、預けられてゐた中老隅田清左衛門方から、長棒駕籠に乗せられて、博多の天福寺に移され、夜半、切腹を命ぜられたのであつた。

君がため、盡すま心、けふよりは、猶いやまさる、武士の一念

これが辭世の和歌である。

この時、西郷は久留米にゐた。馬から下りて宿で着物を着かへようとしたのであるが、福岡

大變！と聞いて、すぐさま又馬を引出し鞭をあてて一氣にぶつ飛ばしたのである。

五百子は、父了寛の命によつて、博多の白水方に驅けつけてゐた。といふのは、前に五卿が太宰府につくや、了寛は人を遣はして、いろいろと慰問をさせ、かねて松浦地方の勤王の志士の動靜を報告させてゐたことだ。それに、これら同志との連絡は、大概五百子と兄の圓心に當らせてゐたので、福岡藩のかうした情勢も、高德寺には逸早く内報されてゐたのであつた。

博多の白水某といふのは、常に志士に宿をしてやつたり、種々便宜を與へてゐる人で、五百子や兄の圓心を始め、父の了寛も度々此の家へは出入してゐた。

五百子は、白水方に来て、いよいよ加藤司書の切腹と聞くと、

「西郷はどうした、高杉はをらぬのか、ともに誓つた間柄ではないかと、聲を上げて泣き叫んだといふ。」

五百子が、西郷と知り合つたのは、この司書切腹といふ二十六日の朝まだき――

博多の白水方から、福岡大變と聞いて驅けつけてゐる途上、はからずも馬上の西郷に會つた。南洲とはこの時以來の仲だ。

一説には、この朝——

思ひがけなく白水方の表戸をトントンと敲き起す者がある。戸を開くと、それが西郷南洲だつた。そして、その時、西郷と聞いて、生一本の五百子が轉び出るなり、

「先生遅かつた、遅かつた」

と、いきなり泣き伏して終つたと云ふことである。

しかし、何れにしても、この福岡の變が、巨人南洲翁と一代の熱血女奥村五百子の縁をつくつた事に間違ひはない。

南洲と五百子 (二)

その生涯を通じて、波瀾重疊、どの部分を拉して來ても、それがそのまま劇であり又小説であるやうな女史の様々な場景の中でも、私が最も興味を感じるのは、この南洲と女史の思ひがけない出會の場面である。

時は慶應元年十月二十六日の曙——

九州一の大都會と誇る博多の町も、表戸を開けた店はまだ數ふるばかり、人の往來も少ない。そこは丁度城下外れ。

運命の皮肉か親切か——

馬丁に轡をとらせた西郷と、ひたむきに脇目もふらず福岡へと急ぎ足の五百子！ その二人

——見知らぬ二人が、バツタリと運命の辻に出くわしたのだ。

「おお！西郷先生——」

五百子は西郷の濃い太い眉、爛々たる眼玉、堂々たる巨軀から、それと察して本能的に呼びかけてゐた。

いきなり女の細腕で馬の轡を恐れ氣もなくガチツと押へられて、流石の南洲も一寸注視したが、すぐいつもの悠揚迫らぬ風情で、

「おはんは、どちらの……」

「唐津の奥村了寛の娘、五百でございます。先生、おそかつた、おそかつた！……」

五百子は感きはまつて泣いて終つた。實際泣けて泣けてとめどもなく、その時は涙があふれたとよくいつてゐた。

西郷は、一寸顔を曇らしたが、しづかに言つた。

「あんたが、奥村了寛殿の、御嬢ナ？ 加藤（司書）どんより、承はつてをり申したが、偉かお活動ぢや、さうしてここへは、いつ來られたナ」

「西郷先生、お目にかかれてよかつた。わたしは一昨日、参りましたが、腹が立つて腹が立つて、どけんしてくれやうかと、いらいらするが、致し方が無うて困りよります」

「加藤どん達、捕られつらうかい、投獄な？」

「はい！先生……」

憤恨の涙は、早くも彼女の臉を破つて滴々と落ちた。しかし如何なる場合にも、天命に安んじて悠揚たる西郷は、ただ巨眼を伏せて一二度うなづいただけだつたといふ。

「解り申した。これも時節では是非がない。あんたもあまり焦慮らんで、國家の爲め、自重ありたい」

「はい……」

馬上の英雄、鞍下の乙女！相見て共に暗然しほし言葉も絶えた。

女史は終生、南洲翁の事を、先生といふてゐた。そして、晩年私に、屢々かういつた。

「西郷先生は大きな者さ。あれほど偉か人は他に見當らん。今の政府の奴どんは、男か女か分らんのが多くて、どうもかうもならん。このままで過たなら、今に日本にも、賄賂をとるやうな役人が出來て來て、某國のやうになりますぞ。貴方など、しつかりしなさい」

かう熱罵冷嘲して、擧句の果ては定まつて聲を立てて泣くのが常だつた。もつて生れた此の熱血は、今も昔も變らう筈がないから、南洲翁も時には、その接遇に困却された事もあつたと思ふ。

しかし、ここに、女史獨得の熱情の純粹さもあつたのである。實際、女史のやうに、お國一途の眞ツ直ぐな氣持で一生を終始した人は、古今を通じて稀れである。出征軍人の遺家族が生活に困つてゐるといつては泣き、皇軍將兵の戦地に於ける苦闘が勿體ないといつては泣き、談論風發しながらも直ぐ聲を上げて泣いてゐた女史の氣持こそ、ひたすらにお國を思ふ眞一文字な純粹性の然らしめたところであらう。

全く、女史こそ世界に比類のない女傑であつた。ジャン・ダークの氣節と、ナイチンゲールの慈愛を兼ね備へたやうな女丈夫であつた。

「六十三年唯至誠身を忘れ國を愛して斯の生を畢る」

この言葉は、活菩薩とたたへられた南條文雄博士が、愛國婦人會の主唱者、わが奥村女史の逝去を悼んで、ものせられた詩の二句であるが、眞によく女史の人と爲りを言ひ現はしてゐると思はれる。

なほ、五百子が心から推服してゐた人に、野村望東尼がある。望東尼は勤王女傑の一人で、高杉晋作なども始終世話になつたものである。

五百子は、この望東尼の書かれた色紙と短冊を、常に大事に秘藏してゐた。

五百子が、父了寛や兄圓心の命を受けて、太宰府に往復した時に望東尼を訪ねたが、當時望東尼は、五卿との間を幕府に疑はれ、姫島の獄舎に送られた後だったので、五百子は落膽して唐津に歸つて來た。

再 婚 婦 (一)

加藤司書と共に刑場の露と消えた一味は、その時二十數名に上つた。それは皆當時の福岡藩の勤王家で、他日の飛躍を期待されてゐた人ばかりだ。それが殆んど一掃されて終つたわけなのだから、爾後、維新政府の要路に立つて活躍した人物は極めて少數になつて終つてゐた。

加藤司書の死については、五百子は口ぐせのやうに残念がつてよく語つたといふ。その司書を五百子が知つたのは京都である。彼女は、そして筑前の志士と結んで大いになすあらんとしたのだつたが、こんな騒ぎとなつて、肝腎の司書を始め其の一味は全滅の形となつて終つた。

後年ある人が司書家の寶刀をもつてゐたのを五百子が見て、その刀に對し泣いたといふ。明治六年征韓論が破裂して、西郷、江藤の一派が廟堂から退くと、世論は其の可否に囂々と湧いた。

そして、翌七年二月に、佐賀の亂が起つたのであつた。

五百子は、この頃平戸に寓居中で、長女の敏子が生まれ、産後の健康もまだ恢復してゐなか

つたため、幸ひに其の渦中に身を投ずる機会から遠ざかつてゐた。

全く、この佐賀の亂には、唐津藩士でこれに内應した者は相當な數であつた。殊に五百子と深交のあつた井上孝繼(後年佐賀縣會議長となつた人)などは、同志を率ゐて山道傳ひに三瀬に出たが、官軍が既に此處を通過して佐賀に進軍してゐたため、涙を吞んで引き返したといふ位だ。そんな有様だつたから、五百子が、若し唐津にゐたとしたら、必ずあの氣性で一味と行動を共にしてゐたに違ひない。が、この混亂に際して、彼女に一兒を恵み、その行動を抑制したのも、これ又天の配劑といふべきであらう。それは、慶應元年十月二十六日、博多の町はづれで五百子が西郷と別れてから丁度八年目の事だつた。

その以前、慶應二年二十二歳の時、五百子は、唐津藩の同宗福成寺の大友法忍といふ僧と結婚してゐる。法忍は、學問もあり立派な青年僧だつたが、この時の結婚は、父了寛が、多くの寺院の筆頭である關係から、寺院を操縦する上からも、有爲の人材を味方に必要もあつて、父の勧めに従つたものである。

この結婚生活は僅か二年餘りで、五百子が二十五歳の年に法忍は病没した。

五百子は良人法忍には固より、舅姑にも良く仕へ、小姑に對しても、實に姉のやうな温さで

面倒を見たので、誰からも愛された。五百子は他面男性的である半面に、極めて女性的な温情を有つてゐたのだ。

是れより先き五百子が二十四歳の時、父了寛が大病に罹つたので、五百子は良人の許を得て實家に歸り、父の看病に専念したが、明治元年二月十二日、一代の傑僧了寛は、五百子の涙ぐましい看護に満足して、豪放闊達な其の一生を終つた。

二度目の結婚は明治五年である。再婚の相手は水戸の浪士で、鯉淵彦五郎といつた。

前記——佐賀の亂の當時、五百子が平戸の寓居中に長女敏子が生まれてゐたといふのは、勿論この第二の良人鯉淵彦五郎との間の子供である。

彦五郎との仲は——過ぐる年、高德寺の近くで彼が追手に迫られてゐたのを、五百子が助け闇に紛ぎれて落ち延びさせた事があつた。それ以來の仲だが、彦五郎は、その後屢々高德寺へも同志の集合などでやつて來てゐたものである。

そして彦五郎との結婚については、母の淺子も兄の圓心師も、あまり賛成でなかつた。だが、お互に國事に奔走してゐる間に、その氣持も分り、戀も成立つたのであらう。結婚後も此の夫婦は國事に奔走してゐた。

しかし、維新の騒ぎも稍々下火となつてくると、先づ經濟的に獨立しなければならぬやうになつた。そこで唐津を夫婦で去つて此の平戸に來たのである。

此の時代の生活は随分惨めだつたらしい。五百子は他家の乳母にもなつたといつてゐたし、仕立物の内職もしてゐたといつてゐた。又時には船問屋のお客の下仕事もしたさうである。勿論良人たる彦五郎も宿屋の番頭となつたり種々やつてはゐたが、全くこの平戸の二年間ほどといふものは、五百子のお針仕事で一家を支へたといつていい位であつた。

何しろ、良人の彦五郎は、士族の商法で、茶の行商をするにしても、先づ、その呼聲から充分に稽古しておかねばならないといふ有様だつた。この一家をよく知つてゐる或る古老の話によると、丁度斷髮廢刀令の出た後の事だつたさうだが、ざんぎり頭の彦五郎さんが、縞の袴に角帯といふ慣れない不恰好な小商人姿で、小さな古着店の土間に突つ立つて、

「お茶、お茶、お茶の御用は、ございませんか——」

と、頻りに稽古をしてゐたのを見た事があるといふ。

ある日など、茶賣りに出てゐて、荷物を川におつことし、茶を乾かす爲めに附近の山で一日中論を呻つてゐたといふ彦五郎である。その上風雅の道に長けた人であつたらしく、詩文書畫

などもよくしたさうだ。

そんな人だから、金儲けなど下手なくせに無けなしの財布の底をはたいて、哀れな親子連れの乞食にやつて終ふやうな事もあつたといふ。が此の彦五郎とも、やがては生別して終つた五百子である。

再 婚 婦 (二)

良人彦五郎とは違ひ、五百子は商賣も中々上手だつた。といふよりはそこにも彼女の一生を通じての一つの信念があつたのだ。

たとへば、唐津魚屋町に古着商を始めた此の頃の話だが、俗にいふ、ざつくばらんで、人の應待にも如才がなかつた。お客様には直ぐ仕入帳を見せて、

「これだけの仕入で、賣り價がこれだ、これ位の手數料が無けりや、私とこが立つて行けませぬ」

と言つた商ひぶり……

だから却つて繁昌したのであらう。

又こんな話もある――

ある日、一人の裁判所の役人が茶を買ひに来て、大變高價な茶を注文したら、

「こんな茶は、あんたの身分に相應はしくない、ここらのもので結構です」

とて、その人に相當な茶をすすめ、而も先方には、それで少しも氣持を悪がらせずに歸してゐたといふ。

かういふ點、私は、女史の信念のほどが、よく分る氣がする。すべてがお國一途、相手思ひの女史だつたればこそ、同じ物をすすめるにも、かうした安らかな氣持でやつてのけられたのであらう。

明治十年西南戦争の起つた時――

南洲を絶對に信賴してゐた五百子は、その擧兵と聞いて、勿論じつとしてはゐられなかつた。すぐさま同志を叫合して、西郷を援けようとした。

傘下に集まつたものは、從兄の印具次郎、帆足三郎の兄弟を始めとして、壯士數十名。良人の鯉淵彦五郎は、無論その領袖格であつた。

この頃は、五百子はもう良人と唐津に歸つてゐた。平戸で營んだ古着商で、やや生活の餘裕を得てゐたのである。と言つても小商ひであるから、その蓄財は僅少なものだ。

五百子は、それを武器や彈藥の購入費にあてた。この熱意に動かされて同志も懸命に武器の集積に奔走した。

ところが、この運動を端なくも耳にした時の長崎縣令北島秀朝は一計を案じて、五百子を密かに佐賀の某所に呼びよせた。

北島は、どこまでも打ち解けた態度で、何氣なく訪づれて來た五百子に言ふのだつた。

「奥村さん、何もかもよく知つてをりますぞー西郷先生擧兵のこと――」

北島はここで如何にも周邊を憚る風に注意してから、聲を低めて續けた。

「奥村さん、我輩も大いに考へとります。だが、今ここでわしが表面に出ては、却つて、西郷先生――いや、われわれ一黨の者の不利となりませう。で、西郷先生が久留米へ進出なさつたら、すぐに立つて、これに應ずる考へです。奥村さん、あんたの方の準備は出來てをりますか。かういふ風に萬事がまことしやかな言葉つきに、流石の女丈夫も、この時はスツカリ欺されて終つた。で――」

「こちらは大丈夫です、計畫は、この通りです……」

と、萬事を打ち明けて、その日の來るのを待つてゐた。と云ふのも、五百子が、あまりにも西郷先生を思ふの情に深いものがあつたが爲めである。

後年、女史は、この時の事を、非常に悔しがつて、こんな風に言つてゐたものだ。

「やはり女子ですなす。いくら西郷先生を思ふあまりと言うても、あんな縣令風情の口車に、あれまで、まんまと乗せられたのは、實に残念でした。しかし、あの時は、私もまだ若かつたし、何せ、西郷先生一途に、思ひつめてゐる時なので、輕はずみに、先生の味方が此處にもあると思ひ込んで終うたもんでした」

かういつて、苦笑をもらしたものだつた。

さて、縣令と別れた、その翌々日――

突然警官の一隊が、奥村五百子の留守宅へ踏み込んだ。そして床下に藏してあつた武器彈藥をスツカリ押収して引擧げてゐたのだ。

「畜生、北島の奴！」

五百子を始め同志の面々は定めし齒を喰ひしばつた事であらう。しかし、北島縣令の巧妙な

此の處置は、五百子及び多くの其の一味を罪人から免れしめたのであつた。

人一倍かち氣の五百子が、この縣令の良にかけられた事を又人一倍後々までも悔しがつてゐた事は當然として、さういふ勝氣の反面に女史にも亦甚だ女らしいものがあつたればこそ、悔しがつてゐるばかりではなく、一面では、よく此の時の事なきを得た北島の處置に對して、感謝をしない迄も、當時の自分を輕彈みだつたとハツキリ言ふ事が出來たのであらう。

かう書いて來ると、女史の勝氣――といふよりも豪氣な一面にやはり女らしいところもあつたといふ最もよい證左となる次のやうな話がある。

この不屈 (一)

それは女史が、十四歳の頃の事である。

當時、大阪との交通は殆んど帆船であつた。五百子は、大阪見物を思ひ立ち、そつと準備を整へて松浦川口に碇泊中の帆船に乗り込んでゐた。

高德寺では五百子がゐないといふので騒ぎ出し、八方を探し廻つた揚句、やつとの事で観音丸といふ船に潜んでゐる事を知つた。

通報によつて、父の了寛は、早速船に來て、五百子を連れ歸らうとした。が、彼女は一向に承知せず、

「どうしても、お父上が、私を連れて歸ると仰有るなら、この首を持つて歸つて下さい。五百は、別段、悪い事を考へて、大阪へ旅立ちを思ひついたのでありません」

「それは分つてをる、とにかく歸れ」

「いえ、五百は、これから大阪の叔母様をたづねて行き、小さい時から御稽古をした三味線の

伎倆を、浪花の町で、ためしてみせる氣なのです」

かういつて動かなかつた。

父の了寛もたうとう根負けがして、彼女の旅立ちを許してやつた。

實際、女史は、その時、そんな決心で大阪行を思いついたのだつたといつてゐた。だから、その時、父に許されて、愈々船中の人となるや、彼女は、毎日の日課として、棕櫚箒を三味線代りとして、口三味線を弾いては一生懸命に稽古に勵んだともいつた。

これは、かねてから大阪といふ土地が、遊藝に盛んなところと聞いてゐたので、必ず、叔母の家へ行くと、三味を弾かされる事があらうと思ひ、その用意に、お浚へをしてゐたのである。後年、あれだけの國家的大事業を成し遂げた女史にも、かうした少女時代があつた事を思ふと全く微笑ましい。小さい時から習つた三味の腕前を試めしに行くなんて、十四の少女としては、豪氣は豪氣でも、また優しい話ではないかと思はれる。

そこで一寸説明しておかねばならぬが、大阪の叔母といふ人は、唐津藩の大阪上屋敷に留守役を勤めてゐた山田勘右衛門の妻のことである。

案の定、山田宅では、三味線の會が催された。それはいろいろの名人上手が集まつた席上だ

つた。五百子は、

「自分の腕前を示すは、こいぞぞ！」

とばかり、全力をこめて弾いたさうだ。

さうして、その撥のさえ、絲の音色が尋常でないといふので、一同感嘆の舌を捲いたといふ事だ。

このやうに五百子は遊藝に堪能だつた。何しろ十二三の頃には、その郷里で評判者となつてゐた位の上達の仕方だつたといふから大したものだつたらう。それに五百子は遊藝に堪能だつたばかりでない、家庭の婦人としても深い修養を積まされてゐた。それは只管に母淺子の周到な躰の賜物である。裁縫は元より割烹から味噌醤油の造り方までも教へこまれてゐたのだ。だから後年家庭の主婦となつて並々ならぬ貧苦と戦はねばならなかつた時も、よくこれを征服する事が出来たのである。

又、その俠氣と豪氣を物語るこんな話もある――

ある時、一人の商人が追跡されて高德寺へ駆け込んで來た。勿論、情を訴へて救ひを求めたのだ。

五百子は、直ぐに商人を庇つて、數日間風呂桶の中に匿しておいた。三度三度の食事も、誰にも分らぬやうに、そつと運んで與へてゐた。それを父の了寛は知ると、我が子の義侠を喜んで、更に、その商人を逃してやる方法について教へたのだ。

五百子は早速父の言に従つて、夕刻をまつと、その商人を簞笠、草鞋、脚絆といふ農夫妻に扮せしめ、自分は、その娘を装ほつて、さながら檀徒父娘の寺詣りといふ様子に見せかけて、補吏の見張つてゐる正門から悠々と出かけ、途上ともすると恐れ慄く其の商人を激ましなうながら、無事に隣村まで送り届けてやつたといふ。なんでも商人が追跡されてゐたのは、とるに足らぬいわづかな物品の間違ひがもとだつたとのことだ。

もう一つは、安政の末の頃のこと――

土地で有名な保利文溟と同業の井山文陽といふ醫者があつた。

丁度その日は唐津大明神の祭禮日だ。

井山が京町を東に、保利氏の宅へ行く途上の出来事だ。井山氏の附近に傳太夫といふ農夫があつたが、これが酒癖の悪い男で、酔ふと發作的に狂暴性を顯はす厄介者だ。

その傳太夫が、井山氏の行く手に千鳥足でやつて來たのだ。井山氏は、よくない奴に遇つた

ものだと内心うるさく思つてゐると、八九歩前迄來て、突然鼻吹をやめた傳太夫が、エヘヘヘ……と頓狂笑ひをすると、

「先生、私は大分、酩酊しちよる」

と、倒れかかるやうにして井山氏を捕へて話し出したのだ。

よくその調子を呑み込んでゐる井山氏は、五月蠅い顔も見せず、調子を合はして頻りに用心してゐたが、その中、札の辻橋を渡つて此方へ來る二十四五歳の若侍があつた。

その若侍は、勿論腰に大小、兩手は袂にして意氣揚々とやつて來た。

と、とたんに、

「ヤッ」

と叫んだ傳太夫が、どうした弾みか、實に手早く其の若侍の太刀を抜き奪つたとみる間に、もうタタタタと五六歩後退りをしてゐて、

「どうだお侍、一つ眞劍勝負をしようぢやないか」

といふ鹽梅で、正眼に構へた太刀先を自信ありけに、ユルヤカに動かしてゐる。

突差の出来事だから、

「アッ!?」

といつた若侍は、同時にサツト顔色が蒼白になつた。

井山氏が、慌てて、

「傳太夫何をする、無禮するな」

と叱りつけてから、

「何卒御待ち下さい」

と、その若侍に頭を下けてゐた。

が、若侍には、もう井山氏の言など耳には入らない。袴の股立を高く取り上げてゐるのだ。

その目は次第に凄氣を帯びて釣り上つて來た。

「お侍、どうぞ御許し下さい」

井山氏が、又さういつて一步前へ踏る出すと、この時やうやく我に返つた若侍が、

「貴様の身内か、無禮な奴！」

と俄に威丈け高になつた。そして小刀をスラツと引き抜くと、

「來い！」

と大きく叫んだ。

人通りの頻繁な祭りの事だ。喧嘩だ喧嘩だ仇討だ!

「若侍が、親の仇を討つんだ」

などと、口々に叫び合つて忽ち四邊は黒山を築いて終つた。この時!思ひがけなくも、

「おや、どうしたんです?井山さん——」

といふなり、つかつかつと人込を分けて進み出て來た十五六の娘……それが又、

「危ない、双物なんか危ない、許して上げなさいよ」

と若侍に一言てしおいて、次に傳太夫の前へ進むなり微笑みながら、

「あなたは何をするの、その双物を私に下さい」

靜かに美しい手を差し伸じたのだ。傳太夫はニヤリとすると素直に太刀を渡した。で再び侍

に向き直つた娘が

「百姓相手に刀を抜くなんて、あなたも何事です、刀が汚れますよ、早くお納めなさいませ」

かう言ひながら徐々歩みよつて大刀を手渡したのである。井山氏はこの間に傳太夫へ何事か目配せしてゐた。傳太夫は稍々正氣を取り戻した目に物をいはせて、素早く人込みの中へ姿を

消して終つた。若侍はやむを得ないといふ顔をして刀を納めると、そのまま急ぎ足で京町の方へ去つて行つた。

その後で――

「井山さん、あなたの御家來は、どうしたんです」

と、娘が親しげにかう言つて井山へ寄り添つて行く。その顔をちつと見つめてゐた井山は、やがて、アツ！と微かに叫ぶや、

「お五百さん！ あ、お五百さんか――お五百さん、大きにありがたう」

心から頭を下けてゐるのであつた。

この井山が、五百子を知つてゐたのは、矢張り保利文溟の家で度々お茶をたてて貰つた事があるからだつた。

十五や六の娘が、白刃の下へ靜々と進みよるなど、その不敵さ大膽さには、全く驚いて終つた――一時はどうなるかと、本當に氣が氣でなかつた――と、その後井山氏が保利氏に、つくづく物語つたといふ。

この不屈 (二)

およそ女史のかうした荒くれた事のみを知つてゐる人は、女史が三味や舞踊といふやうな遊藝に堪能な人だつたとは思ひもよらぬ事であつたらう。

しかし、當時の唐津一般の士族の間では、武藝の修業は勿論第一番で、娯樂といふと謡曲位のものだつた。その他に娯樂機關などといふものは全くなかつた。そして、時々、地方を巡業してゐる歌舞伎芝居などが、附近の村々にかかつた時、それを内密で見物する位が關の山だつたのだ。

これは恐らく何處の藩も殆んど同様だつたらう。だからあまり外出をしない士分の家庭ではふだん懇意に交際してゐる町家の子女を招いて、彼女等の歌舞を見せて貰ふのが唯一の楽しみだつた。

こんな事があるので、町家の方でも、ふだんから、その子女に競ふて遊藝事を勵ませておき、

これをきつかけに交際を上々に求めてゐたのである。

さて、唐津藩城下では、かうした子女の藝能を一般に知らせる好都合の機会が、一年に一度あつた。それは、唐津大明神の祭禮の日に、遊藝の奉納を行ふといつて、町家の子女は、ここを先途を着飾つて、町内を練り歩くのだ。

勿論、町家の若者を始め、士族の子弟まで、この日は、それぞれ變装して、これに加はつてゐたといふ。

ところが、ふだん町人は煙草入を左の腰にさし、士族は右腰に差してゐたので、うつかり士族の子弟が左腰に差してゐて監督の目付役に發見され、大目玉を喰ふといふ若侍などもあつたといふ。

そして、この遊藝奉納の風習は、後に盆^{ぼん}扮^{やくし}装と變り、今もなほ其の名残をとどめてゐるのである。

五百子も愈々、腕に自信が出来てくると、子供心にも晴着を着飾つて、この遊藝奉納に出てみたく、父母に頼み込んだ事があつた。

しかし、格式をもつ同家では、町家の子女と同様に町を練り歩く事は、なんとしても品位を損ずるとして許さなかつた。

が、かうと思ひこんだが最後、テコでも動かないのが五百子のことだ。両親もほとほとあました結果、例の戸川先生に説諭を願つて、やうやくのことで思ひ止まらせたこともあつたさうである。

五百子の兄 (一)

奥村五百子が、西郷舉兵と聞いて、僅かな蓄へを全部投げ出して、それで購入した彈藥武器を、時の北島縣令の謀略で、臺無しにして終つた事は、前にも書いたが、この熱血女五百子にとつて、そんなことよりも何よりも困つた事は、やはり、この西郷舉兵に關連して、肉親の兄圓心と其の意を異にしたことである。

兄の圓心は、勤皇の志厚い同じ父了寛の血を享けついでるものの、五百子とは違つて、熱情をどこか胸底深く藏してゐるやうな性格の人であつた。若くより五百子同様、父の命をうけて諸國の志士と連絡をとつてゐた。又随分この人の爲めに志士の中でも面倒をみて貰つた者もある。

しかし、この西南の役の時には、その圓心に、東本願寺から、決して西郷に組しないやうにといふ嚴命が來てゐたのだ。それは東本願寺が政府支持の立場にあつたが爲めだ。それに、圓心年來の主張たる朝鮮布教の具體策も講ぜられつつあつた際とて、大いに自重せねばならぬ羽

目にあつた。だから妹五百子の舉に對しては反對の立場に立つてゐた。

五百子の悲しみは勿論ながら、その他、皇政復古までは、行動を共にして來た多くの同志も、この圓心の反對には弱つた。全く圓心の不参加は一味にとつての大打撃だ。一同は度々手を盡して勧めたのだが頑として應じないのだ。西郷の兵は、既に肥後、薩摩境をドン／＼と前進してゐるといふ折柄だ。ここに於いて、一味の者は、己を得ず圓心を除かうと決意するに至つた。が、これも五百子から、

「大義の爲めには致方がありません。どうしても兄が承知せねば、斬るより外に道はない」と、言ひ出したのがもとである。

最初は同志達も、流石にそれを承知するに忍びず口を緘してゐたが、五百子のあまりの熱情に動かされて終つたのだ。

が唯一人、正木彦馬が、かういつた。

「圓心先生は、了寛和尚他界後、我々同志が、皆一方ならぬ御庇護に預かつてゐる人だ。あの江藤新平先生の事件の時だつて、どうだ！我々が今かうして安閑として來られたのも、要するに、圓心先生の信仰と靜かな熱の力があつた爲めではないか、それを殺さうなどは、もつて



の外だ……」

しかし、五百子は、さういはれてみると一層ハッキリ言はねばならなかつた。

「それはそれ、これはこれです。兄には、宗教上のどんな意見があるか、分りませんが、我々が今日、西郷先生をお助け仕様といふのは、君側にゐる者の中で、間違つた心がけの人や、その爲めに出来る大間違ひの制度を取り除ける爲めです。われわれは天朝の御代を仰ぐ爲めに、共に死生の巷を潜つて來たんです。それに今日のやうな有様では心細い限りです。こんな調子で行くと、結局又もとの幕府が出来るだけです。」

西郷先生は決して、朝廷に弓をひくやうな方ではない。必ず第二の幕府を倒さうとしてゐられるだけです。だから、西郷先生に反くものは、兄といへども捨てては置けません。情に於いては忍びませんが、義と情とは別のもの——」

五百子の熱情溢るる言々句句には洪水のやう力強さがある。

荒くれ者の壯士達も、いつ迄たつても誰も流石になんといつてよいのか分らない有様だ。

五百子は、尙もそれから、烈々火のやうに論じ立てた。

「流石に奥村さんぢや——」

一人が、吐き出すやうに言つて、それで又他の一人が口をきつた。

「奥村さんの心底恐れ入つた。見上げたもんう。已むを得ぬ、まことに大義親を滅すぢや、」

この奥村さんが、立派なお手本だ——ところで圓心さんを、誰が斬る？……」

同志達は、又此の言葉で、ぐつと行きづまつたやうに、互ひに顔を見合した。

そこで五百子が一層決意をこめて言つた。

「二三人御手を貸して下さらば、誰かれといはずに、私が参ります」

又揚がしんとした。

そして、時刻は、今夜の十二時と決定した。だが五百子としてみれば、なんといつても骨肉を分けた兄であるから、暗打ちするには餘りに情が無い。で、今一度、せめて自分一人だけで、よく兄の意見を訊き、最後の説得を試みよう、その夕方、突然兄を訪づれたのだつた。だが兄圓心の決意も堅かつた。

五百子の兄 (二)

圓心は、最初五百子を見た時、少しも平素と變らない落ち着いた調子でいつた。

「五百さんか、よう来た」

その物腰、態度、顔かたち……は亡き父そのままの、ただ意志の強さだけを、どこかに秘めてあるやうな男であつた。

五百子は懐しさと、その懐しさの爲めに一層哀しくなるやうな氣持で、靜かに言つた。

「火薬や、その他、武器の事で、此の間中は、いろいろ御心配をかけました。が縣令が、幸ひ穩便にしてくれましたので、安心はしてをりましたが、本當にすみませんでした」

ところが、兄は、相變らず、眉一つ動かさない冷厳な態度で、

「少しもわしは、心配などしてはをらなかつた。一切は皆、御佛の御心にあることだから……」

と、かういつただけだつたといふ。

かうした兄の態度は、この一代の熱血女奥村五百子にとつていつも苦手で、全く弱らせられたもんだと、よく言つてゐたが、實際、兄の圓心といふ人は、前にも一寸記した通り、何事も靜かに考へつくしてでないと、手を出さないといふ性質の人物だつた。

しかし、それだからといつて、決して熱情がなかつたわけではない。又その尊皇の志とて決

して五百子に劣つてゐたわけではないのだ。

何しろ徳川三百年の礎が、やうやくぐらつき出したといふ天保十四年に、高德寺で呱呱の聲を上げ、豊松丸といつた九歳時分に僧籍に入り。圓心と改稱された十七八歳の頃から、よく父に伴はれて上京したり、父を訪つて来る多くの志士と交友してゐたのだ。

父了寛の命で、諸藩の同志との連絡につとめたのも、勿論五百子よりは早かつた。こんな圓心が、初めて二條家今出川の別荘で祖父寛齋卿に面謁したのは、やはり圓心と改名した此の頃の事で其の時の記憶を、よく五百子にかう物語つてゐたさうだ。

「祖父は、この時純白の袴を着けてをられた。大様迫らぬ中に犯し難い威嚴があつた。ニコヤカにわれら父子を側近へ召して、種々とお話があつたが、御食事を賜はつたのに、剥けた萩膳に、茶碗の蓋は瓦器だつたよ。だから小さい時分、わしが食事の不平などいふと、父は——公卿一般のくらしむきは質素を通り越して、悲惨なものなんだ。宮中の御生活向だとして、申上げるだに恐れ多い御質素ぶりなんだ。不平などいふべきでないぞ——と、心からいませめたものよ。そして、必ず、そのあとでかういつたものだ——それを思ひ、徳川氏始め、諸大名の豪奢な生活をみると、悲憤の涙を催さずにはをられない——と……」

幼少の頃から、かういふ父の感化を受けた圓心だ。十五歳（安政四年）の時、日田の廣瀬青村の塾に學び、更に十八歳から二十歳までを肥前多久の草場船山塾に學んだ。この間に周防の月照の佛法護國論を暗誦したといふ位だ。ところでこの月照だが、これは京都清水寺の月照と並稱せられたほどの勤王の傑僧であつて、吉田松陰を初め、長藩の勤王思想は、この月照の感化に負ふところが少なくなかつたといはれる人物だ。

幼少から父了寛の勤王思想に育まれ、その青年時代に多く月照の感化をうけた圓心が、只管國事に奔走するやうになつたのも亦、當然の歸結といふべきだ。

五百子の兄 (三)

文久元年近藤浩左衛門一味の勤王黨が逮捕された時、高德寺もこれに關連のある事が露見して、圓心は閉門を命ぜられてゐる。青年氣鋭の圓心は、この時まだ十九歳だつた。彼はこの事以來、唐津藩の注意人物となつた。で身の危険を知るや、しばらく大阪の伯父山田勘右衛門宅に逃れ、時の移るのを待つてゐた。

そして、一年ばかりして、山田氏の取りなしで許され歸國したものの、天下益々多事なのを見ては、又どうしても拱手してゐる事が出來ず、再び出奔して王事に盡す事となつた。これが元治元年、圓心二十二歳の夏のことだ。

圓心は、この時、長崎に行つて坂本龍馬に會ひ、その深謀に共鳴して同志糾合の任務をとる事となり、九州各地を廻つて翌年再び長崎へ來た。

それから更に平戸に渡つて同藩の空氣を探つた上、伊萬里に歸つて來たが、幸ひ此處まで來たので、ひそかに唐津の情勢を探らうとて提川さげのかわの明尊寺を——佐賀支藩の蓮池領であつて、唐津藩の監視の目を遁れるのに好都合の場所とて、常に附近勤王家の會合所となつてゐた——を訪ねると、明日了寛が此近所まで門徒の法會の爲めに來られることになつて居り、又此寺へも巡回して來られると云ふことも分つた。そこで和尚から、

「明日は御父上も、當寺へ見える事となつてゐるから、一目お逢ひなされ。父上もさぞかし御喜びの事と存じます」

と強ひて勤められるままに、ここで久方ぶりの父子對面をした。

父了寛は、久しぶりの我が子との対面で、大變に喜びながらもしみじみとして、

「お前が、皇事に奔走してくれる事は大變嬉しいが、ここに一つ困つた事が出来てをるのだ。多分藩の方から迫つた結果と思ふが、本山からの内命では、そちが歸山して、おとなしく在住しない限り、高德寺も折角跡目あつて無きも同然故、關所にするといふて來てゐるのだ。自分も養子の身の上や、わしの代になつて、高德寺が廢寺となつては、祖先に對して申譯がないのみならず、本山に對しても、一寺を廢するといふ事は、これ又相すまぬ。われわれ父子が、これまで微力ながらも、皇事に盡す事が出来たのも、大いに本山の力にもよる事で、もし、この背景がなかつたならば、志は如何にあらうと、決して、それを達する事は出来なかつた筈——よくよく今の場合を考へ、しばらく離伏する氣で、時機の來るのを待つ事にしては、くれまいかのう……」

かう諭すのであつた。

しばらく黙念として考へ込んでゐた圓心は、やがて面を上げると言つた。

「久しく御父上に、御心配をかけ、申譯ありません。では仰せに従つて、今日唯今より歸山致しまする」

この意外の言葉に、父の了寛は喜び且つ驚いた。年少氣鋭の圓心と雖も元より總明のたちである。勤王の父が、勤王のわが子に對して、勤王運動の中止を説いてゐる切ない苦衷が充分理解出来た爲めに他なからう。

そこで父の了寛は、更に膝をすすめて、圓心の本心を訊いた。

「よく承知してくれた。しかし、一時の喜ばせに、諾したのではなからうのう。それでは、一層父が困る時の來るのを、覺悟しなければならぬのだから……」

「父上、御心配御無用に存じます。若輩の身をもつて、潜越な事を申しますが、私のこれ迄に探り得ましたところでは、薩長の連繋は、既に出來上つてゐるやうでありますし、天下は必ず近い中に、我黨のものとなりませう。それで、今私如き者が一人位、ここで身を退いたところで、この大勢が逆轉する事は金輪際ありませぬ故、以後は宗務第一に精進するでございませう」

「うん。よく言つてくれた——」

「それにです——釜山海高德寺の使命を考へます時、もうここらで、私が宗務一途に勵む決心をなし、その高德寺創建の趣旨に基いて、朝鮮なり滿洲なりへ海外發展の途につくことこそ僧

侶としての私の國事でございますう」

「うん、父は喜ぶぞ」

圓心の言葉には、自信が溢れてゐた。了寛は早速打ちつれて引擧げた。この日、圓心は竹皮笠を猪首にかけ、垢じみた手拭で頬かむりをして、腰袋に魚籠をさげ、釣竿を肩にして、夕闇迫る頃、父に従つて唐津城下に入つたのであつた。

ところが、唐津藩では、先年の事もあるので、一層嚴重に監視する事にして、永の蟄居謹慎を命じたのである。

時に慶應元年の初め、圓心二十三歳の春のことだつた。

それから、早くも十何年の月日が流れて、明治十年三月、西南の役となつたのである。そして、はからずも、血肉をわけ合つた兄と妹の意見の衝突に際會したのだ。

五百子の兄 (四)

五百子は、兄の靜かな態度を、一寸うらやましげに見つめてゐたが、やがて思ひきつたやう

に言つた。

「ときに兄上、此の間から何度も何度も申してゐる、西郷先生へ味方のことにつき、五百はもう一度、これを最後として、御心底を伺ひに参りましたのです。同志の方々も、兄上を引き込むか引き込まぬか——」

五百子が皆までいはない中に、圓心は、靜かに、手で制して、

「その事は、今迄にもいつた通り、もう決していうてくれるな——」

「……では、どうあつても西郷先生の味方には——」

「わしの心は決つてゐるではないか、わしは本山からの達しもあつて、宗法のため以外には動けんのだ。これも亡父の心なら、そなたが義の爲めに動いてゐる心も、やはり亡父の心ぢや。兄妹と生れて、互ひに敵味方となるのも、これも佛の御胸にあることよ」

「父上が御在世なら、きつと、父上も、あなたも、西郷先生のために、味方をされたであらうに……。兄上、もう一度だけ、西郷先生の爲めに、心を翻へして下さるまいか」

「二度と申すな、無駄な事ぢや。そなたは、一すじに唯さういふ風に考へてをるが、父上は御在世の時とて、御佛に仕へる事を第一となされてゐたのだ。されば、わしが西郷方に組せぬ

とて、父の御旨に反いたとは言へまい。また、御維新の目的を通すため、そなたが西郷方に味方する心も、父上の御旨ぢや。道は二つでも父上の心に副ふ事は一つぢや。そなたは父の義のため、わしは法のため……」

實際女史は、この時ほど困つた事はないといつてゐた。兄圓心の決心は、微動だもしない。

五百子は、ひそかに涙をのんで決心せねばならなかつた。

「この五百も、女だてらに、一途に御國のため君のためと、佛の御心を御心として一向専念してをりますが——唯今の兄上の御言葉よく分りました。もう二度と、西郷方へなど申しませぬ。しかし……」

五百子も、かうは言つたものの、流石に、今夜十二時に、同志が襲撃してくるとは言へなかつたのだ。ところが、すぐにそれと知つた圓心の方から、

「それで、わしも安心はした。しかしそなたら一味の武器彈藥の件について、またそなたら同志の謀略一切について、よく知つてをるわしぢや。このままでは濟まぬことと、これも、わしは、よく覺悟してゐる」

兄の顔を凝視してゐた五百子の眼に、なんともいへない光りがサツと漂つた。それは喜びと

も哀しみとも知れぬ一種不可思議なものもつ輝きだつたらう。

「兄上、よくぞ仰有つて下さいました。實は、今夜十二時に、同志が、兄上を襲ふと……」

「それもこれも、御佛の御胸よ……」

「兄上の御命を、妹の私が頂かねばならないとは、これも御佛の御胸、父上の御遺志でございませうか」

「さうぢや。父上は、單なる御佛の僕ではなかつた。同時に、また、單なる勤王の志士でもなかつた。信仰の強い御方であつた。大きな性格をもたれた父上であつた。その父上の性格の一つ一つをもつて、お互ひに、別れ別れにならねばならぬ兄妹ぢや。みな因縁ぢや。しかも行く道は、兩方とも信念に基いた正しい途ぢや」

それから間もなく此の兄妹は、互ひに涙を見せまいと努力しながら、別れを告げ合つた。

今宵十二時が、圓心襲撃の時刻だ……

五百子は父母の位牌に伏し拜んで寺を出た。この兄と妹の話を襖越しに、偶然立聞をしてゐた徒弟の一人が、五百子が引擧げるとすぐ、圓心の前へ進み出で、

「大變な事になりました、ぐづぐづしてはをられませぬ、さあ早う此處を引擧げませう、早

う、早う」

と急ぎ立てて、大力の彼は有無を言はせず、師の坊を拉して何處かへ連れ去つた。

日暮れて、ポツリポツリと大粒の雪さへ加はり刺客の踏み込むに恰好の暗となる。

暗殺の大役を承つたのは従兄の印具次郎であつた。彼は風雪を犯して寺へ來たが、しんかんとして人の氣配はない。

「圓心さん、圓心さん」

と、二三度呼んだが誰の返事もないので、本堂に入つて大聲で、

「奥村、圓心はをらんか」

と、怒鳴つた。

だが矢張り何の答へもない。ただ持佛の間の灯が、ヂヂツと時たま鳴りを立てるだけである

次郎は少時佇んでゐたが、ハタと手を打つと、

「こりや大物を、とり遁したか」

と呵々と大笑して引擧げて行つた。

元々深い怨恨のある仲ではなし、實は、よく逃げてくれたと心中では喜んでゐたに違ひない

のである。

二つの性格 (一)

五百子が平戸へ移つたのは明治五年であるが、古着屋を始めたのは明治八年三十一歳の時だから十年の西南の役の少し以前には、もう平戸を引き拂つて唐津へ歸つてゐたのだが、この平戸落ちについては、前に一寸記した通り、母や兄が反対した再婚の良人鯉淵彦五郎と皆への意地にも獨立自活をしなければならなかつたためだ。

そして、五百子夫婦には、この平戸が一番好都合の土地だつたのである。といふのは他でもない。

この平戸藩主松浦登岐守清公の孫女中山慶子典侍が、明治天皇の御生母に當らせられる方從つて藩中の勤皇思想には、殊に根強いものがあつて、藩士中にも五百子夫婦を知つてゐる者が相當にあつたのである。それでこれらの同志を頼つて一時の住居を此處に定めたわけだ。

ところが、皇政復古運動の最中には、水藩の浪士として一きわ人より目立つて役立つた良人の鯉淵彦五郎も、いざ實際生活の中へ投げ込まれてみると、そんな人だけに俗塵の中で生きぬ

ける力がなかつたものか、一家を支へる何等の職業も見つからない。

そこで、勝氣の五百子が、船問屋の女中奉公をしたり、洗濯物をしたり、お客の縫ひ物などして、やつと親子の糊口を凌いでゐたのだ。そこへ一女は儲けるし生活は一段と窮迫を告げて來た。

そんなこんなで、五百子が風流人の良人をあてにしない爲め、古着屋を初める事となつたのであるが、この古着屋を開店するにしても資金がない。そして、偶然にも、五百子が、この資金三百兩を獲得するについて、次のやうな面白い話がある。

丁度長女を生んで間もない頃の事だ。二人の間にかうして立派な女兒まで出來てゐるのに、戸籍上の手続きは、まだだつた。それで五百子は良人と共に、その郷里水戸に行き、戸籍の貰ひ受けに就いて相談を始めた。

良人の彦五郎は、家を出てから十一年目の歸省だから、スツカリもう様子は變つてゐる。ただ寡婦となつてゐる嫂の外には、知つてゐる人など殆んどなかつた。

が、その寡婦の嫂が第一番に反對を唱へ出したのだから堪らない。つまり素性も知れない女浪人へ、養子などに遣れぬ、家門の恥辱だといふのだ。尋常者でない五百子が、これを耳にし

たのだから、これ又黙つてゐるわけはない。間の襖を引きあけるなり、その席上へズンズン進み出て、

「奥村五百子は私でございますが、今、承つてゐますれば、素性も知れぬ女浪人と仰有つてゐましたが——私の父は左大臣二條治孝の二男寛齋の子で、唐津高德寺の養子となつた了寛と申します。鷹司家や九條家とも親戚の仲です。彦五郎は天晴れ天下の名士と私が見定めて夫婦となつたのでございます。これまでもと辛苦を重ねて、かうして今では子までもうけた仲、左様な御言葉は、あまり御道徳ではございませぬか。五百子は、貰ひうけの叶ふまでは、ここを一步も退きませんから、御承知下さい」

親戚の者達は、これを見て眉をひそめ、

「ひどい女に、ひつかかつたもんだ。幾らでも金をやつて、片をつけて終へ」

と、かう評議を一決した。そして嫂が、すぐ五百子と對談する事となり、

「手前では、彦五郎を養子にやる事は、出来ませんから、どうぞ、これ迄の縁と思つておあきらめ下さい。そして、これは、ほんの僅かですが、旅金の代りとして差上げます故、どうぞ御引取りが願ひたいものです」

こんな事になつて終つた。さあ大變！ただでさへ人なみ以上に大きな眼をギョロツカせてゐる五百子、一層大きく眼を見開くと、キツト居住ひを正して、

「失禮でございませう。私を賣娼婦か、ユスリと心得てをられますか。彦五郎と私は、一朝事ある時は、共々死なうとまで誓つた仲です。金などは慇懃しくありません。戸籍だけが頂きたいのです——天下に名高い勤皇のこの水戸に、夫を金にかへようといふ教へは、ありますまい」
強氣な五百子の辛辣な一言！ハツと吐胸を打たれたやうに身を縮めた嫂が、やや慌てた調子で、

「左様なわけで、申上げたものではございません」

と、額に汗を滲ませた恐縮ぶり。

で直ぐ、それと見て進み出た叔父が、

「なるほど奥村さんの御言葉の通りだ。藩を脱走して参り、その時は、金錢以上の御世話に預りながら、今となつてこんな風に御断りする手もあるまい。一先づ彦五郎を御所望通り婿にやつて、その後で、此方へ共々歸つて貰ひ官員になるなり、なににでもなつて貰へば、いいではないか——」

わけのわかつた此の叔父の仲裁で、始めておとなしやかになつた五百子。そして、目出度、相談も成立したのであつた。

そして、僅かな此の水戸滞在中に、さらに二女の光子が無事に生れて身を軽くした五百子は、その産後の恢復を待つて、平戸へ向け出發したのであつた。この出發の時に、鯉淵家で、彦五郎分家の用意として蓄へられてゐた金三百兩を貰つたのである。

これが、彼女夫妻に古着商を思ひ立たせた動機である。で夫婦は、その歸途、京都や、東京で古着を仕入れて唐津へ引擧げて來たのだつたが、歸つてみると意外にも母の淺子は既に此の世の人ではなかつた。百ヶ日さへもう過ぎてゐる有様だ。

「遅かつた、遅かつた。せめて、私のこの生き姿だけでも、一目なりと、母上に見せたかつた……」

と、五百子は、聲を上げて歎いたといふ。始終、母の側で看護してゐた異母妹の七百も、この姉の心中が推しやられて共に泣きむせん。

二つの性格 (二)

古着商を営むやうになつてから、家運は漸やく順調に向ひ出した。といつても良人の彦五郎は相變らずの國士肌とでもいふべき人柄であつたが爲めに、店の事にはあまり携はらなかつたが、ひたむきな如才ない五百子の努力でさうなつたのだ。

そして、明治八年から十九年頃まで、この古着商は繼續された。この間十一年には又長男の勢一が生れてゐる。

ところが、明治十九年の秋十月、どんな考へがあつたのか、この魚屋町の古着屋の店も閉ぢて福岡に移つた。が、ここで開いた店は僅かに一年——そして、翌二十年九月に、この良人彦五郎と別居する事となつて、五百子は唐津に三兒を連れて歸り、再び茶店を開いてゐる。

元々維新當時は、勤皇といふ大きな目的のために結ばれた夫婦であつたが、その性格が全々反對であつた爲めであらう。

例へば、長男の勢一が、他家の子供と喧嘩をして泣いて歸つてくると、

「男が喧嘩に負けて、泣いて歸つてくる事があるか。さア、この刀をもつて、もう一度行つておいで。負けた者なぞ、お母さんは家に入れないよ」

五百子は、必ずこんな調子で勵ますのであつたが、そんな時、良人の彦五郎は、又きまつたやうに、

「子供をつかまへて、そんなに喧しくいふ事はないぢやないか——おい勢一、早く上れ上れ」と、こんな有様だつたといふ。

「お父さんも元氣がなければ、子供にも意氣地がない。私ばかりヤキモキしたつて、これぢや張り合ひがない」

五百子は、よくこんな愚痴をこぼした。

全く、五百子は自分の信じた事に勇敢な女性だつた。感情も並々ならぬ激しいものがあつたその代り反面には又甚だ涙もろいところもあつて、人をも斬りかねないくせに、神妙にお針仕事もするし、三味線も弾いた女だ。

勝氣な五百子は、苦節十年、貧苦の中に夫や子を養ひよく困苦にも打ち勝つて來たが、士族出身の世間知らずの良人は、一向家計の事は風馬牛で、専ら詩畫や風流に耽つてゐる性の人だ

つた。

だから、五百子が刀を突きつけて勢一を叱咤してゐる障子一重向ふでは、良人の彦五郎が赤毛布の上へ、唐紙や畫仙紙をのべて頻りに南畫を描いてゐたといふ風情だ。

この男性と女性の二つの世界は、所詮氷と炭であつた。

遂に二つの世界には相離れる時が來た。

「あなたみたいに、男のくせに、天下のために働けぬ世捨人のやうな人は、御免だ。五百子は女でも、もつと意氣地があります」

「お前のやうに、女のくせして、家を外に出歩く女は、わしも御免だ」

かういふ、たつた一言か二言の短かい會話で、この夫婦の別離は解決して終つたのである。敏子、勢一、光子の何んにも知らない三人の子供は、泣き悲しんで此の兩親にまつはりついたけれど、ハッキリもう他人となつてゐた二人であつた。が、それでもいよいよ別れるといふ時、

「さあ、これが別れの印です」

と茶の間から出て來た五百子の手には、黒髪が一束、白紙に包んで握られてゐたといふ。五

百子は、飄々と出て行く良人の後姿を見送りながら、

「皆これから、母さんと一緒に、お國のために働くのです」と、さういつた。

彦五郎は、それでも羽織と袴だけは折目正しくつけてゐたさうである。

後年、五百子は、この時の夫婦別れの事について大谷旬佛師にかう語つてゐる。

「大きな仕事をするには亭主など邪魔ですから、別れました」と――

實際、それは極めて何氣ない調子でいつてのけてゐたといふが、編者は、五百子女史の亡くなつた今日でも、その言葉だけは、どうもあまりに何氣なさ過ぎるやうな氣がして、何か奥歯にもものひつかかつてゐるものを感じずにはゐられない……

獨進道 (一)

三兒をつれて唐津に戻り再び魚屋町に茶店を開いた五百子は、その頃、相知村あきむらに炭坑が開發されて人口が急に増加し、食糧品の需用が盛んになつたのを聞くと、早速この地方へ野菜の行商をもくろみ、その荷車の後押しをして毎日數里の道を往復した。

土地の人々は、赤パツチに男羽織、裾を高々とからけた男同様な五百子の姿に、非常な人氣を集めた。

長女の敏子ももう十五才、それに氣丈な性質で、母の留守中は店の管理から弟妹の世話まで十分切盛してゐた。

五百子の活動は愈々自由だ。だから、依頼があるとないつに關らず彼女はよく人の世話をした。その主張するところは常に道義の上に立つてゐた。すべて依故最負のない直截簡明な處理の仕方だつた。で若し我意を通さうとするやうな人があつたら、遠慮會釋もなく頭から怒鳴りつけてゐたものだ。だから一般世上の噂には信頼もあり人氣もあつたけれど、極く少數の不純

の一群からは不絶狂人扱ひを受けてゐたらしい。

編者が、女史と最初の會見をしたのは、丁度この頃の事だ。それは明治二十二年の正月だつた。

本書の冒頭にも記した通り、編者はまだその時二十三歳の海軍少尉候補生であつた。しかしありがたい事に、

「舊唐津藩の若殿様が、海軍士官になられて、初のお國入りだ」

と云ふので、唐津の町は、この海のものとも山のものともまだハッキリしない私風情を迎へてくれるのにお祭騒ぎをしてゐた。若殿様——などと言はれてゐるものの、私は、もう小笠原の跡目をついでゐたので、軍艦高千穂の乗組員として佐世保に寄港したのを幸ひ、舊藩地へ歸省したのだつた。といふのも、元來、私は幼時を下總で送り、唐津には八歳の時、わづかに二ヶ月程しかゐた事がなく、その他は殆んど東京で育つた男だから、舊藩士の中でも私を知つてゐる人は少なかつたのだ。それだけに、私が佐世保へ來たといふ事を聞いた舊藩士達は、非常に懇望してくれたので、遂にこの歸省となつたのである。

今となつては、その時分の人達も殆んど故人となり、極く稀にしか私の知つてゐる者はない

が、しかも、明治二十二年といふと、その頃はまだ、舊藩主といふ名前だけでも、身分不相應に私如き者を歡待してくれたのである。それで自然、應接する人の數も相當多くなつたため、ある日、私は、居室の庭を開放して、一度に會ふ事としたのだつた。

會合は午後一時から始まり、三時頃には、相當私も疲勞を覺えてゐた。そこへ俄かに庭の隅から賑やかな三味の音が起つたのだ。枯芝を縫つてウネウネと續いてゐる庭の道を、順々に禮服をつけた人々が列をなしてゐる其の後から、突然、思ひももうけぬ此の三味の音だつたので人々は啞然としてゐた。私も實際不審であつた。

三味の一行は年頃の美しい娘が四人で、その中へ一人、白足袋に麻裏草履、しかも顔に鬼の面をつけてゐるといふ風變りの女が混つてゐる。それが友禪の派手な着物をきて赤禪を斜にかけ、如何にも陽氣さうに、不絶三味を弾きながら、

「あゝ、こりや、こりや」

と囃子立てつつ、唄ひつ踊りつ私の方へ來るのである。

その風俗が、唐津地方の「やつし」といふものである事は、私も一見して知つてゐたが、多

くの禮服をつけた人々の中へ、こんな異様な一行が何故踏み込んだのか、それが一向に分らなかつた。

人々はクスクスと笑つてゐるばかりだ。それでも道化た其の假裝の女は平氣の平座で、三味をひきひき、首をふりふり、たうとう私の前迄やつて來た。そして、いきなり其の鬼面を取り除すと、慇懃に御辭儀をして、

「殿様、御目出度う存じます。私は奥村五百と申す者でございます。實は、このほどから度々御伺ひ申しましたが、いつもいつも玄關拂ひ、取次いでいただけません。で據所なく、こんな眞似をして、參りました。御許し下さいませ。そして是非共、一度、御面談を下さいますやう御願ひ申上ます——」

と言つた。

なるほど、これが奥村といふ女か……と私は思つた。といふのは實は、このほどからこの人が再三私を訪ねて來てゐるといふ事を聞かされてゐたし、舊藩士の者からはこの女が來たら、會つてくれるな、狂人女だ——といふ風にはれてもゐたのだ。

だが、その音聲、言葉つき、態度——には、一見して、私に、尋常者でないと思はざるを得ないものを與へた。私は少時、ぢつと女史の顔を注視してゐた。女史も仰いで注視してゐた。その眼先は鋭かつた。私は直ぐかういつた。

「あなたが奥村さんですか。……今日は、忙しくて御話を伺ふひまもない故、長崎へ御出でなさい。ユツクリと御會ひませうから——」

「では殿様、きつと近い中に參りますよ」

さういふと、恭々しく一禮してから、女史は又面を被つて直ぐ今迄のやうに、あゝこりやこりや——と調子面白さうに去つて行つた。

これが、女史と最初に會つた光景だ。それ以來女史は私のやうな者を、殿様と稱して何かと相談相手にしてくれた。私も及ばずながらその最期まで、微力を致したつもりである。

あとで聞いた事だが、當日の一行の中には、女史の娘の敏子も光子も加はつてゐたといふ。そして、その歸途、五百子は、保利文溪翁の宅に、威勢よく、あゝこりや、こりや——と練り込んで、

「よかつた、よかつた！先生、本當に殿様と約束して來たよ、長崎で御面會下さる事にして來た——かういふ風に、私は、踊り込んで行つたのだよ」

と、翁に、その時の有様を細々と物語り且つ實演して見せたさうだ。

その後、五百子は約束通り、長崎市今町の綠屋旅館へ私を訪づれて來た。

その時、女史は、如何にも恭々しく、一間を隔てた遙か下座に平伏して、三ツ指ついて祝辭を述べられた。それが女史になんとなく不似合ひだつたので、私が、

「奥村さん、そんなお芝居はよして、さあ遠慮なく、ここへ御出でなさい」

さういふと、すぐ、

「お許し下さいますか——」

とて、私のすすめるままに、ビヨコンと立ち上つたかと思ふと、

「こりやア話せる」

と言ひながら、つかつかつと歩んで來、私と火鉢を挟んでベツタリ對座した。

それから女史の、つづける四方山の話は、唐津方言丸出しで、時はいつの間にか面白可笑し

く過ぎた。

全く、この會談以來、私が思ふだけでも、私のやうな者を絶対に信頼してくれてゐたやうだつた。日清戦争の時など、夜半井戸端で水垢離をとつて、私の武運を祈つてくれたといふ。これは長女の敏子さんから聞いた事で、私は實際嬉しく思つた。

獨進道(二)

それから間もなく、憲法發布となり、二十三年には最初の衆議院議員の選挙が行はれ、ここに奥村五百子の大活躍の幕は切つて落された。

その頃、唐津地方には、郷黨會と實利會の二派があつて、實利會の方では、

「東西松浦郡をもつて一選挙區とする以上は、此の地方の實情に通じた人を擧げるのが當然だ。それには舊唐津藩士で久しく西松浦郡長を勤めてゐた、河村藤四郎氏が適任者だ」と主張してゐた。

一方郷黨會では、天野爲之氏を推してゐた。天野氏も舊唐津藩士であるが、この人は上京して帝國大學を卒へ、その當時は早稻田專門學校（今の早稻田大學）に教鞭を執つてゐた經濟學の權威であつた。

五百子は、この天野氏推薦の先頭に立つて、國會議員は日本の政治を議する人だから、日本の名士を推挙しなければならぬ。この點では天野氏が最適任者であるとして譲らなかつた。何故、五百子が、天野氏を支持するに至つたかといふと、それより前の事——唐津出身の醫學士で帝大の助教授をしてゐた保利聯氏が歸國した時、會て中央政界の動向や代議士本來の使命とするとゝころなどを解いて、且つ天野氏の學識と人格を推賞した事があるので、これを聞いて以來、天野最眞になつてゐたのである。

天野氏は、五百子の説に共鳴する多くの地方有志に推されて立候補する事となり、選挙の結果は大多數を以つて勝利となつた。

そして、明治二十三年の第一議會は無事に終了した。しかし、翌二十四年の第二議會は自由改進の兩黨が一致して政府に極力反対したため、議會は解散となつた。當然改選が行はれたが此の改選に當つては、政府擁護の立場にあつた西郷從道と品川彌二郎の二巨頭が、國民協會な

るものを組織して可成り極端な干渉をやつた。そして政府黨を「吏黨」又は「官黨」と稱へ、反對黨を「民黨」と呼んだ位だ。ところで佐賀縣の前代議士は皆この民黨であつて、松田正久武富時敏、天野爲之、二位景暢の四氏で、いづれも天下に名だたる名士揃ひだつた。

選挙は明治二十五年の寒氣凜烈な二月であつた。この國會議員の改選は實に唐津の天地を血腥くした。

五百子は日夜、松浦橋際の選挙事務所につめかけ、荒くれ男達と共に大きな火鉢を圍み堂々と國政を論じてゐた。

ある夜の事。天野が伊萬里の演説會へ壯士四五人を伴つて行く途上、敵方の壯士二十人ばかりに襲はれた。相手の中には此の地方の無頼漢の棟梁である男浪といふ力士上りの命知らずも加はつてゐた。彼等は官黨の小幡信義の命令できたのだ。水主町蛭子角の善公の俤に乗つて二人輓で追ひ着いたのだ。俤夫の善公も、相知村では脚も速かつたが、それよりも喧嘩の手が速いといふので「喧嘩善」といふ仇名をもつてゐるほどの男だつた。

天野が危険と最初に見てとつたのは、五百子の次女光子で、まだ十七をこその小娘だつたのに流石は五百子の娘で、短刀を持つて跣足のまま松浦橋際の事務所へ駆けつけて來るなり、

「お母様、大變です、四辻で、天野さんが……」
とさういふなり又髪を振り亂して表へ飛び出ようとした。母を案内して行かうといふ氣構へなのだ。

それと聞いて、天野護衛の爲めに東京から隨行して來てゐる讀賣新聞の記者、加來正之が、早速出發しようとする、五百子が、すぐ、加來を呼び止め、

「得物は——」

「もたぬ——」

「これを——」

五百子は光子の持つて來た短刀を手渡した。正之は、短刀をおつとり懸命に驅け出してゐたそれを見て五百子も亦跣足で飛び出した。が、現場へ驅けつけるのかと思ひの外、彼女は少し行つて横丁へ外れた。そして、とある醫者の玄關へ立つなり、大聲で

「先生、四辻に怪我人です、早く支度を願ひます！」

と叫んでゐたといふ。

なるほど、ここらは、五百子が用意の周到さを證據立てゝゐる。

間もなく、跣足で五百子が短刀を抜き放つたまま現場へ馳せつけた時は、天野はフロツクコトのまま街路に倒され、味方の壯士も全部負傷してゐた。

「卑怯者！」

五百子は突つ立つたまま敵に向つて大喝した。敵方の連中は皆五百子をよく知つてゐるのであるが、髪を振り亂して短刀を構へてゐる五百子の殺氣にうたれたものか、やや尻ごみをした。

やがて五百子は敵方注視の中で、天野を脊負つて、

「天野爲之は、お前達の弄り者にはせん」

さういふと、輕傷の味方を介添へに、悠々事務所へ引擧げて來た。

天野の傷は幸ひにも輕かつた。五百子は其の天野をすぐ唐津近くの大島にかくした。そしてかうした修羅場までを演出したにも拘らず、選挙の結果は官黨の大勝利だつた。落選して天野は、間もなく小舟で鹿家（福岡縣糸島郡）に送られ、そこから東京へ歸つたとの話だ。

この選挙後——即ち其の年（明治二十五年）の九月二十三日の秋季皇靈祭の日——

この選挙の干渉者であつた時の内務大臣品川彌二郎子爵が、地方遊説として佐賀市に乗り込んだのだつた。すると武富時包を始め民黨の面々が、同じ日、民黨大會を佐賀市の江藤新平記

念碑前で開催した。

「天野爲之の受けた壓迫の讐をとれ」

と最初に叫んだのは五百子であつた。

そして附近の町や村々から押しよせる群集は、皆、民黨と記した白布を胸につけ、白刃を抜き放つてゐるものもあれば、棍棒を携へてゐるもの、大剣を持つてゐるものがあり、農民の一隊は席旗に竹槍といふ凄まじさで全く全市は殺氣に漲つたといふ。

一方、品川一派の國民協會の會場は縣廳前の協和館であつたが、その縣廳から西方の街路に警官を堵列させて民衆の殺到を警戒してゐる様は、これ又物々しかつた。ところが、それと知つた一隊の民衆は、日峯社前を南に横ぎり西に迂回して襲撃仕様とした。警官は人垣を作つてやうやくこれを防止したといふ。

かういふわけで、品川内務大臣の遊説は民衆の反感を一層大きくしただけで、次の選挙には國民協會の大敗となつた。で品川内務大臣は已むなく長崎を経て福岡に至り、唐津で又大會を開く事とした。が、此處でも忽ち民黨の武富を始め井上孝繼、山邊濱雄、中江豊造等の幹部連が五百子宅に會して、同様民黨大會を開く手筈を定めて終つた。

そして、早朝から唐津へ押し寄せて來た郡内の民黨は、品川内務大臣の宿所である大和屋前に來ると、皆口々に、

「我々の敵は、ここにゐるんだ」

と叫び立ち、今にも亂入しさうな氣勢を示したので、宿の人々も生きた心地がしなかつたといふ。

この日、國民協會の會場は城内の公會堂で、民黨の會場は舞鶴公園だつた。然も此の兩所の距離は二町位よりなかつた。そして民黨では二十數挺の四斗樽を列らねて柄杓酒に元氣をつけ武富等の激勵演説に大衆がいやが上にも昂奮し、たえず公會堂に向つて今にも突進しさうな形勢を示して、ワーワーと喊聲を揚げてゐたといふ。堀木格明の一隊などは、西郷と品川の首を擬造して、これを竹槍で貫き、公會堂の庭内に投げ込んださうだ。又筒先を公會堂の方に向け、煙火を亂發したりするものもあつた位だ。で官黨の幹部連も危険を感じて遂に品川を公會堂の裏から舟にのせて、そつと旅館に歸した。が、その旅館の内外たるや又物々しいもので、抜刀の巡查や壯士でもつて固めてあつたのだ。

かうした險惡な空氣の中にあつても、五百子は常に民黨の幹部の一人として其の謀議に加は

つてゐた。だから一部の反對黨の者からは勿論、一般世上の人からも狂人扱ひをされてゐたといふ。しかし、この頃から、五百子の社會的活躍の激しさが、一段と世に現はれ出したのであつて、それから間もない明治二十七八年の日清戦争當時には、彼女は、唐津の鐵道敷設や開港貿易のために、大いに奔走してゐる。

獨進道 (三)

唐津は、松浦川口に位し、明治初年の頃から、海軍の出張所が設けられてゐて、御用の石炭を扱つてゐる土地だつた。また舊藩時代の大倉庫もそのまま利用されてゐた。そんなわけで港の唐津としては相當樞要な土地である。

が、明治二十二年頃に、この地が不用となつた時、その拂下運動を起した一二の商人があつた。五百子は、それを知ると、

「これは個人の所有すべき地でない」

とて、直ちに有力者山内小兵衛や井上孝繼等と協議して同志と共に上京し、天野爲之、辰野

金吾等の斡旋を得て、時の要路樺山資紀大將や榎本武揚子爵に面接、つぶさに陳情するところあつて、町有地としての拂下を願出たのだつた。そして二十五年の八月、始めてその許下を受け、ことに唐津町有財産は約三千坪の要地を加へる事が出来たのである。

また、一度唐津へ踏み込まれた人は皆御承知であらうが、あの東唐津（満島）と唐津新堀との間に、三百六間眞一文字に架けられてゐる名にし負ふ松浦の長橋——これも五百子の努力の賜物なのだ。

その起りはかうだ——

明治初年までは此の兩所の連絡は勿論渡船であつた。それが滿潮の時には岸から岸へ横付けにされるが、一度干潮となると、兩岸より約二百間が干潟となり、嫌でも此の間は歩かねばならなかつた。殊に少し激しい風雪などになると交通は杜絶だ、人々の不便は大變だ。しかも架橋の發議があつても、この長距離の架橋は、當時誰にも不可能事とされ、てんで問題にされなかつた。

それが明治二十四年頃となつて、長谷川敬一郎といふ人の發議で眞剣に論議されるやうになつた。この時の計畫は、和多田堤の並樹の松を拂下け願つて、これを材料とし、經費は橋の通

行料を徴集して充て、餘剰金は大成中學校の費用に充てようといふ案だつた。

が、中江豊造といふ人が、憤然起つて反對した。その理由は、

「和多田堤の松並樹は防風林であるばかりでなく、松浦川の護岸林として、寺澤志摩守以來實に三百年間も、保護に保護を加へて來たものである。それを伐採するとは何事か。もつと他によい方案はないのか」

と、かうであつた。

で、この時も遂に此の問題はお流れとなつたが、かうした問題の起る度に、必ず一枚買つて出たのが奥村五百子である。

「和多田の防風林は、飽くまで保護する必要がある。しかし大成中學の經費も安定を計らねばならん。そして橋賃で、これを補ふといふのは妙案ではないか。よし、何とか善か方法が、必ずあらう……」

かういふのが五百子の主張だつた。そして早速彼女が、同志に代案を練らせた擧句が、岸嶽官林の杉材の拂下げ出願となつた。そこで五百子は斯案を提けて又々上京して、時の農商務大臣榎本武揚子爵に面談し、百方交渉の結果、たうとうその目的を達して歸郷したのだつた。

それが明治二十七年の中頃のことだ。

おかけで架橋工事は早速その緒につき、一年有餘の日子を費して、明治二十九年二月に竣工を見たのだ。今舞鶴公園より、眞一文字の美事な此の長橋を望んで、その景觀の美を賞する人は澤山あらうが、この橋が、かうしたいきさつで成つた事を知つてゐる人は少ないであらう。

五百子に對する土地の人氣も、この架橋工事がその緒についた頃から、やうやく好遇を受けるやうになつたらしい。何しろ、どんな事でも、お國の爲め人の爲めといふ堅い信念一すじに驀進してゐた五百子なのだから、これは當然といふべき事柄だ。

そして、唐津地方の人々も、丁度この頃からソロソロと目ざめつつあつたらしく、この架橋工事着手と相前後して、唐津鐵道の敷設問題や、唐津開港の運動が引き續いて起つてゐる。

先づ始めが鐵道敷設の問題であつたが、これは藩政時代からの唐津炭田が、明治になつて急にその需要が高まり、採掘が膨脹を極め出した事に起因してゐる。つまり採掘されたこの石炭の運搬は、松浦川の舟運によつてゐただけであつて、水量の少ない時は大變な不便を來し従つて運賃も甚だ高かつたのだ。それで土地の實業家——大島小太郎、平松定兵衛といふやうな人々が鐵道敷設の議を起した。すると時の東松浦郡長加藤海藏の如きは公職まで辭して専ら鐵道

會社創立に奔走するといふやうな事になつた。そして、やがて、この加藤、大島の二氏が相携へて上京し、佐賀縣選出の代議士や在京有志を芝の三縁亭に招いてその助力を請ふたのだつた。この時も、奥村五百子は一役を買つて出てゐる。彼女は例の熱烈な調子で賛意を表し卒先して株主となり、大いに人々に株式の應募を勧めて廻つた。

幸ひこの計劃は、中央の財界からも相當な支持を受ける事となり順調に成立した。

獨進道 (四)

ついで唐津開港の問題だ。

元來、唐津鐵道の敷設は、附近の炭田開發を促す必要上からであつて、その炭田開發は當然石炭の輸出を前提としなければ成り立たない。そこで、この唐津開港の運動の起つた事は、これ又必然の歸結といはねばならない。

そこで此の開港運動にあつても思ひつめると一時もぢつとしてはゐられない五百子の事であるから、その時は、所有の唐津鐵道の株をスツカリ賣却して終ひ、その利益をもつて上京し

奔走するといふ熱心さであつた。ここで清廉潔白、無慾恬淡な女史の爲めに是非共説明を加へて置かねばならない事は、元々財的に恵まれてゐなかつた五百子が、株を賣つた利潤で上京したといふ事に就いてである。それはざつと次の通りだ。

はじめ唐津鐵道會社が成立し、愈々鐵道用地の買収に取りかかると、相知村の大河内某といふ者が強硬に反對したため紛糾に紛糾を重ね工事が一向に捗どらぬので、株價はそのため大暴落を來した事があつた。それがため一時の流行につれて應募した農民達の中には、驚いて十二圓五十錢の拂込を、その半値以下で慌てて賣却した。

その時、五百子は、大阪の或る人と連合して、株式の買ひしめを斷行し、後、株價の騰貴をまつて、これを賣却し、多大の利益を得たのである。

さて上京した五百子の開港運動は例によつて激しかつた。近衛、二條兩公を初め、榎本武揚、樺山資紀、谷干城等といふ、地方政客などの容易に近づき得ない要路の顯官邸に至り、膝詰談判、口説落しの戦法をもつてした。

私は、女史のかうした時の奇襲を、よく心得てゐるが、あの強引な硬談判には、その意氣に感じながらも、定めし皆さんがもて餘された事であらう。

ところで、この唐津開港運動が一度世間に傳はるや、その開港場を假屋灣に仕様といふ競争者が現はれた。それは假屋灣沿岸の三村、値賀、有浦、入野といふ村々の有志で、この人々が山村直太を代表者として、その運動のために上京させた。

この假屋灣開港場の運動は、唐津開港に對する地元の熱意を二分するものであつて、さきの唐津港——即ち唐房灣をもつて開港場に仕様といふ運動員大島小太郎は、懇々と山村直太に競願の不利を論じて、その運動の中止を勧め、

「どんなに君達が運動しても、有力な人に面會する事が、第一容易でない。それに少々の運動費位では、とても成功するものでないから、中止なされ」と、かういつた。

すると、山村應援のために横濱から驅けつけてゐた青木興三が、これを耳にして憤慨し、「われわれを侮辱するも甚だしい。有力者に會へないなどは以ての外だ。きつと成功してみせる。とにかく松田正久氏に逢つて依頼する事にするが、みてをれ」

とて、その翌日、衆議院に松田氏を訪問したところ、氏は快よく此の二人を引見した上、更に衆議院議長楠本正隆氏に紹介したのであつた。

といふのは——抑々この假屋灣が、曾て肝付兼行少將や、稻垣萬次郎氏等によつて、天下に紹介された事のある天然の良港と稱され、しかも此の時提出した開港請願の趣意書が、稻垣その人の起草になつてゐる名文だつたからであらう。

そして、この趣意書が、更に、楠本議長の手から貴衆兩院の議員に配付されるや、これを一讀した多くの議員は、唐津港としての唐房灣と此の假屋灣とが、實際は數里を隔てた東と西の別所である事を知らないため、一樣に唐津港としてこれを賞讃したので。

だから唐房灣を目的としてゐる大島一派は、両者が別の港である事をこのさい進んで辯解するの面白くなく、奇妙な立場となつて終つた。が、五百子のみは得意然としてかういつたさうだ。

「それで善か、開港場にさへして貰へば、實際の港は、唐津でなけりやならんから、なあ」
全く、この時の五百子はすましたものだつたといふ。ところが、相手方の山村が、この五百子の言葉で、大いに覺る所があつたと見え、

「ともかく、唐津に開港場を、設けて貰ふ事にしよう」
さういつて、その後の運動は、一切これを大島一派に一任したのであつた。

實際開港場としては、單に物資の集散状態から考へても唐房灣がよいにきまつてゐるので、當局でも惑はず、唐津灣と決定し、明治二十九年三月、勅令をもつて發布されたのであつた。この吉報に唐津町内には歡聲がどよめき渡つた。

開港祝賀會の當日――

五百子は、前に貰つた鍋島侯爵家よりの上衣と、私の贈つてゐた下着、天野爲之氏よりの緋絆、辰野金吾氏よりの丸帯、加藤海藏氏よりの羽織、保利文溟氏よりの金紐等を身に飾り、主賓の待遇でその式場に臨んだ。そして式後、餘興として、一曲の舞ひを舞つたのである。

五百子は又、明治三十年に、鏡村の永田米藏や加藤海藏等と謀つて、養蠶業の有利なる事を説き、桑園の栽植を奨励し、佐賀縣知事を動かしてその補助金を仰ぎ、幾萬本の桑苗を購入して、これを農家へ無償で配付し、大いに養蠶業の基礎を固めてゐる。

が、元來、養蠶業の奨励は、生繭の圓滑な買上が肝要である。更に買上げた繭の處理については當然製糸工場の設立を必要とするので、町田村に製糸會社を立て、繭の購入と製糸業とをやらせる事とした。けれども此の事業はまだ當時の農村にあつては、進み過ぎた事業だつたので失敗に終つてゐる。

しかし、數十年後の今日となつて、盛大を極めて來た松浦地方の養蠶は、何といつても先見の明あつた五百子の賜物といはねばならぬ。何しろ、五百子は此の計畫を樹てると二女光子をわざわざ群馬縣富岡に派遣して、養蠶と製糸に就いて研究させてゐた位だ。だが不幸にして唐津では實地に應用が出来ず失敗に終つたのだ。しかも、その後、五百子が朝鮮へ教化に出かけた時、偶々彼の地でこれを利用する機會に遭遇してゐるのである。

日本村 (一)

明治三十年十月——

五百子は兄、圓心の布教状況を視察のため三人の同行者をつれて、朝鮮に行つた。その時は京城を振り出しに木浦にまで行つたが、更に二十里の路を馬で光州に入つた。兄の圓心が韓國布教を企てたのは明治六、七年頃の事であつた。さきにも一寸記したが、十九歳の時、新進氣鋭の勤王青年僧として唐津藩の注意人物となり、二十三歳、父の言によつて勤王運動から脱して、以後一すじに宗門の教化に没頭してゐたかの如き此の圓心が、佐賀の亂には又々江藤新平を助けようとして本山から制壓されて終つた事は、讀者諸氏も御承知の事であるが、かうした勤王の志厚い圓心が、明治十年西南の役には、妹五百子と全々相反する立場に立つてゐたのも要するに、韓國布教といふやうな海外發展の一大もくろみがあつたからである。

即ち、維新の戦塵が五稜廓の落城をもつて其の終局となり、世間が漸やく武を疎んじ出した頃朝鮮に對して維新政府が王政復古の實を告げて、使節を派遣し修好を求めたのだつた。とこ

ろが朝鮮では我が王政維新を了解せず國書を却けたので、武人は之を怒つて、あの征韓論を唱へ出したのであつた。この時に當つて、圓心は、國家として平和的進出の必要な事を論じ、その一方策として、範をキリスト教徒の宣教方法に則とり、先づ僧侶の韓土派遣を提唱した。この韓國布教の海外發展策は、釜山海高德寺の大理想とするところで、高德寺創建者である淨信法師以來三百年來の大使命であつた。それが偶々征韓論の擡頭によつて、高德寺十三世たる圓心の胸に勃然と蘇つたのである。

だが時機は容易に熟さなかつた。征韓論の紛糾が中央巨頭の分裂を來したり、延いては佐賀の亂となつたりしたのもその原因の大なるものである。

そして西南の役に兄妹である圓心と五百子の離反する立場に迄立ち至つた。この時は、その少し前に、時の外務卿寺島宗則が内務卿大久保利通を介して、朝鮮布教かたを獎めて來てゐた本山である東本願寺としても内々その實行方法に就いて研究し、やつとその成案を得たので、釜山と縁の深い高德寺を起用する事になつてゐたのだ。だから圓心も大いに自重するところあつて、時機の到來するのを待つてゐたのである。

そして、明治十年八月十六日——

愈々圓心は韓國布教の命を受けたのだ。彼は欣喜雀躍直ちに祖先の靈へ此の報告をし、その任に赴くこととなり、九月十五日神戸より西京丸に乗り、長崎に来て貫行丸に乗り換へ、大倉喜八郎等と同船して、五島を経て、二十八日釜山に着いた。

上陸すると先づ、當時の管理官近藤眞鋤氏に頼み、荒廢してゐた參制官々舎を借りうけて修繕し、東本願寺出張所といふ看板を掲げて、一意傳道に着手する事とした。それは明治十年秋十一月の初めのことだ。

翌十一年十二月には、官許を得て、大谷派本願寺釜山別院と稱するやうになつてゐる。これが現在の釜山別院である。

圓心が、ここに駐まつて、主として邦人の間に布教するうちには韓人の僧侶の中でも、それを聞いて教へを乞ふ者も次第に多くなつたので、官人も段々に來訪する者が増えて行つた、しかし、その頃の一般鮮人の頑冥さと來ては如何とも手のつけようがなかつた。それで翌十一年には、本山から朝鮮留學生を派遣して一般鮮人の生活状態や、諸種制度や、宗教等々について一切の研究をさせる事となつた。

越えて十二年には、日韓修好條約が成立したので、わが公使館を京城に置く事となつた。そ

して、魚允中等十數名の高官、紳士が來朝して我國の活動状態を視察したが、間もなく、われに倣つて國政の一大改革を唱へる開化黨なるものが起り、陸軍中尉堀本禮造が聘されて、軍隊の改革を行ふやうになつた。

が、この改革は、守舊派の怨みを買ふ事となり、遂に明治十五年の暴徒騒ぎを惹起して、わが公使館は焼かれ、堀本中尉は殺害された。そして、この事變後は、清國の勢力が傾に加はり韓國は再び其の制肘を受けるやうになつた。で開化黨の一派は、日本に頼つて支那の壓力から免れようとし、更に十七年の變となつたのだ。この事變は、開化黨の一派が、清國に頼つてゐる事大黨に對してクーデターを加へる計畫の下になされたものであるが、結局失敗に期して、金玉均、朴泳孝以下の志士が、日本に亡命するの已むなきに至つた。

ここに於いて、清國は朝鮮を殆んど自國領扱ひとし出し、日本の勢力は振はなくなつた。で圓心も亦やむなく釜山を引揚げ、本山の事務局に出仕する事となつたのだ。

當時の我が外務當局は、列國の意向を憚つて、亡命客に對する待遇方も常に遠慮がちだつたので、圓心はこれを本願寺に請ふてその一半を引き取つて保護する事とした。この間、金玉均、朴泳孝等は、轉々として日本の各地を流浪し、時に小笠原島に移り、時に北海道に潜伏するな

ど、その生活はみじめなものであつた。

圓心は、その不遇を憐れみ、妹五百子と相謀つて、五百子を、近衛公や大隈伯を始め、よく

私の家などへ出入させ、喜捐を乞ふては彼等に贈り、不斷、その保護と慰藉に勉めてゐた。

明治二十七年、金玉均が上海で暗殺された時、圓心はそれを聞くと聲を上げて慟哭したといふ。五百子は直ぐその時上京して来て、近衛公等を歴訪し、日本政府の賄甲斐なさを痛罵した

日本が、このやうに雌伏すること十年にして、二十七八年の戦役となつたのだ。そして、馬關條約が朝鮮を清國から獨立させる事となり、新たに日本の保護の下に、朝鮮國內の開発が行

はれるやうになつて、茲に再び、圓心兄妹の活躍舞臺も開かれたのだつた。

この頃、女史は全く私の家を根城のやうにして、よく訪ねて來たが、來る時は必ず藥瓶持參

であつた。その上大きな荷物を背負ひ、男の穿くメリヤスのズボン下に下駄ばきといふ扮装。

當時、私の宅は代々幡に在つたが、あの甲州街道へ一ヶ月に二度三度は、この異様な服装の女史が現はれるので、

「小笠原の家へ、狂人婆さんが、行く」

と云ふ評判になつた位だ。

そして、女史は諸々を奔走してゐるうち、氣むづかしくなると、時には痲癩玉を破裂させたが、又さういふ時に限つて、よく私の家へやつて來てゐたやうで、女中等は取扱ひに困つてゐた。全く、事業に熱心な事も人一倍以上だつたが、氣むづかしいことも亦人一倍氣むづかしいところのあつた女史だ。だから實際世間では、奥村女史が怒り出すと、それを宥める者は前の近衛公か、其の他一二の者よりないと言つてゐた位だ。しかし、そんな女史にも頭の上らぬ者が一人あつた。それは大臣でも大將でもない。私の宅にゐた用助後に金五郎といつた老僕だ。この用助は、十五の時、初めて賄方に出て來たのだが、夜になると、必ず居なくなつて終ふが、朝になるとチャンと歸つて來てゐるのだ。上役が心配して、ある晩、こつそりとあとをつけた。すると、二里ばかりも離れてゐる大内村の自分の家へ大急ぎで歸つて行くのだ。それが四つ頃——今日でいふと十時頃から、上の用が濟むと、すぐその足で駆けて行つてゐたのだ。上役が、樹蔭から、ちつと見てゐると、我が家の戸口に立つた用助が、トントンと戸を叩いてゐる。中から老母が戸を開ける。そして老母が、座敷へ上るなり、

「お前、毎晩、家へ戻つて來て、よいのか」

「自分の用は、スツカリ濟んでゐるんだから、お母さん、安心おしよ」

さういふ用助が、懐中から紙包を出して與へてゐる。よく見ると、それは其の日の所謂殿様のお餘りなのだ。老母は有難がつて食べてゐる。

それから母子は睦まじく主家の事について、喜んで語り合ふ。さうして夜の明けぬ中に、用助は又急いで其處を引擧げるのだつた。

上役は、スツカリそれを見とどけて、蔭で泣いてゐたといふ。やがてこの事は、私の父の耳に入つた。さうして用助は私の代になつても、すつと手許にゐたが――

この用助は、私の父が御維新の際、奥羽地方に逃れてゐた時、父が無事であるやうにと、掌に油を注ぎ燈心をたらし、その燈心に火を點けて、三日三晩も願をかけたため、その掌が岩のやうになつてゐた。私は、その岩のやうな掌を撫でると、その忠實さに觸れるやうな氣がして、幾度も泣かされたものである。

明治四十年には、用助は小笠原の名物男といつて、東京府知事から表彰された。

この用助の知合ひの男が、奥村女史の小さい頃に、女史の生家高德寺の寺男をしてゐて、女史が六つ七つの幼けない年頃に、よく用助の話をしては、

「自分の村には、こんな孝行者、忠義者があるんです」

と、教へたものだといふ。

これが女史の頭に染み込んでゐて、後年、流石の女史も頭を上げなかつたのであつた。

女史が、近衛公とか他の顯官と激論をして險惡な面持して歸つて來ると、女中共が、又奥村さん怒つて歸つて來たと、痛いものに觸れないやうにしてゐる時など、この用助が出て來て、

「奥村サン、又怒ツチョルナ」

と、お國言葉で側へ行くと、直ぐ女史のお天氣は回復して、

「ナンだ、山口の伯父サン、又叱り居ルナ」

と、云ふ風に應答したものだ。

女史は、これほど孝子忠僕に對しても感激性の強い人だつたのである。

日本村 (二)

明治三十年夏六月――

五百子は兄圓心と、相携へて京都に上り、東本願寺に出頭して、再び韓國布教の進言をした

間もなく老法主より東上の命が来た。すぐさま上京した五百子兄妹は、親しく法主に面謁して、種々の指命を受け、歸郷の途についた。

この時、近衛公は大谷伯につきのやうな書簡を送つてをられる。

(前文略) 却説昨日奥村圓心來訪し、今般貴本山より布教のため、朝鮮へ出張被仰付候趣話し仕候に付、東邦の大勢等に付、心付候愚見申聽候事に候、抑々近來は西洋の諸國、頻りに東洋の事に注意致候様に相成、今日にして百年の計をなさざれば、遂に挽回致難きに至るかと被存候。就いては東邦の先進國たる我が國の如き、率先して他を誘導致候事必要と被存候のみならず、近來、兎角清韓兩國共、我國に對し面白からぬ感情を和らけ、東邦諸國唇齒輔車の交りを爲すに至らしむる事は、獨り當局者の盡力のみにては六ヶ敷、如斯場合には宗教と教育の力を借り候事、最も必要に有之候事と被存候。就いては今回の御企圖は深く表賛意候のみならず、將來に於いても飽く迄御方針御貫徹被成、特に海外布教には御盡瘁被下候様、國家の爲め、又法の爲め、切に希望仕候。圓心西上の趣に候間、乃ち戴一書得貴意候。

六月二十二日

早々頓首。

近衛 篤 麿

大谷 先 登 殿

大谷 勝 尊 殿

また山吉盛義氏には、つぎの如く紹介されてゐる。

(前文略) 今回朝鮮布教の爲め罷越候奥村圓心師は、眞宗本願寺の僧侶に有之、前年久しく釜山、元山へ出張致しし人に有之、今般又々本山より派遣被致候事に相成候。年齢は五旬に餘れども、十分國の爲め、法の爲めに盡瘁不致覺悟にて罷越候趣、中々氣概ある坊様に有之候。すなはち御紹介仕候間、官の手によらずして行ふべき御世話は、御都合にて被成候様希上候。布教の順序等に就いては、色々御考へ可有之と存候に付、同師に御面會の上御洩し被下候はば、同師も非常に便宜を得候事と存候。早々。

近衛 篤 麿

山口 盛 義 殿

それから大隈伯は、元山、仁川等の領事に宛て、次のやうな書面を送られた。

拜啓、陳者此度本願寺派布教の爲め、奥村圓心師渡航致候に付いては、御地滞在中は自然何等か申出候儀も可有之候間、諸般相當の便宜を興へ候様致度、此段御依頼申進候。拜具。

明治三十年六月二十一日

大隈重信

在仁川 石井領事殿

かやうな始末で、圓心は先づ釜山に至り、それより慶尙、全羅の各地を視察した後、遂に光州をその布教の根據地と定めたのであるが、元來この朝鮮布教は、兄圓心の事業であり素志であつて、五百子は、この場合、兄妹としてよりも寧ろ御國の爲めにといふ一條の心から、それを全幅的に支持したに過ぎない。

さて圓心師その頃の事情は、その後の同師から本山によせてゐる報告書によつて知る事が出来る。左にその報告書の概要を抄録して参考の資としよう。

昨年六月十四日奉命東上し、當局大臣及び要路知名の士を訪ふて意見を叩き、且つ、保護を求む。諸公皆大いに之れを賛し、且つ從來僧侶の無氣力、卑屈を痛罵し、以て今回の舉を壯とし、各々意見を開陳して前途を督勵さる。始め咸鏡北道に入り、漸時露境に及ばん計畫なりしも、近衛、小笠原諸公先づ之れを排し、全羅慶尙の間を選ぶの得策たるを指示され、當局大臣亦之れを賛せられしを以つて、茲に愈々木浦附近を目的として、視察を遂ぐる事とし、同月二十九日歸京復命、習月十六日通譯岩下徳藏と共に發程、十七日釜山に入り伊集院

領事に會ふて、内地旅行券及び韓國監理の發行せる布教視察の特別保護狀を得、越えて二十日内地に入る。その九十里の山河、十四日の日子を費し、過ぐる處慶尙に於いては金海、昌原、咸安、鎮海、宜寧、晋州、泗州、昆陽、河東、全羅に於いては、光陽、順天、樂安、寶城、凌州、南平、光州、羅州、務安の十八郡、略々地理人情を察し、八月二十日無事木浦に至る。茲に視察の目的を了へ、即日汽船に便乗して釜山に還り、萬端永住の用意を整へ、再び木浦に航し、遂に光州府を以つて最適の地と認め、九月二十二日夜二時同府に入り、地方長官觀察使の保護を求む。當時觀察使尹雄烈氏は、曾て十五年事變に際し因縁ありしを以つて、萬般施設上大いに便宜を得、十月十二日萬障を排し西門外不動坊に一民家を購入し、此處に初めて永遠布教の基を定む。爾來韓客の來往、僧侶の往復、或ひは信徒の渡船となり、學校の設立となり、相互情誼を修む。日々來拜受教するもの續々不絶、以つて今日に至る。

(以下略)

於全羅南道光州府 布教師奥村圓心

代理通譯 岩下徳藏 記

圓心は妹の突然の來訪に喜んで、今までに得た一切の體驗談を物語つた。その時、兄妹は共に泣き、共に喜び、又共に怒り笑ひながら一夜を語り明かした。

その際、圓心は今後の布教について五百子に相談るところがあつた。五百子は大いにそれに賛成し、すぐさまその意見を携へて歸國した。

その要旨は――

殖産興業の指導獎勵を大眼目とする實業學校の設立と、青年の指導教化を行ふことと、日鮮親善のために地方名士を勸めて日本視察に赴かしめる事等であつた。

左の一文は、五百子が、當時唐津から私によこしたものだ。

昨二日夕刻無事歸着當市へ投宿仕候。却說當節の旅は日子も僅々三旬餘にて、素より十分の視察も遂げ不申候へども、觸目踏地雞林の風物一として感慨に入らざるはなく、從つて我國勢上、體面上不可云の慨事のみ多く、一行も往々熱涙を湛えられ候事も有之、深く御洞察願上申度、就いては卑妾事十日ばかり、唐津滞在、諸事取纏めの上、直様東上、十分の御高見御伺申上度候間、甚だ恐入候得共、近衛公爵御官舎に於いて、要路の士一同と夜會開筵の存じよりに候間、何卒右につき、滿腔の御同情を以つて宜敷御配裁被下度、甚だ自儘な

がら前以つて御敷願申上候。先は不取敢早々敬具。

十一月三日

奥村 五百

これによると、五百子は、今後の方針について、私の援助を期待してゐたのであるが。本願寺の朝鮮布教は、もともと日本政府も大いに賛援してゐた事として、奥村師の事業については外務省の機密費から京城の公使館を通して、學校の經營費としてそれ相當の補助金を給與する事となつた。

で五百子は再び渡鮮する事となり、この時は次女光子と、その婿の奥村節太郎と、教師として草場龜之助、補助員田口達平、杉江常三郎、劍客河原井祐兼、下女磯口するゑ、洗濯婆さんの赤星むろ等八人を引卒して行つた。間もなく後から教師小島虎雄、大工豊島某、醫師片桐某の三人も渡鮮参加した。

五百子は光州に着くと、先づ觀察使尹雄烈氏を訪づれ、實業學校敷地の借用を願ひ出た。尹雄烈氏は元來親日派の巨頭であつたから、早速相談は調ひ、その他種々の便宜を與へてくれた。そこで五百子は京城に行き、校舎の建築を請負にして、これを切り組み光州に輸送して組立てせる事としたが、工事は豫定通りの進行をみて、明治三十一年九月、尹觀察使を筆頭に光州の

名士を多数招待して、これが落成式を盛大に舉行した。

かう書いてくると、奥村女史の朝鮮開拓もさのみの難事業でもないやうであるが、第一この實業學校の設置にあつても、鮮人の襲撃を受けるといふ苦難に遭遇してゐるのだ。

それは實業學校の隣接地たる柳竹藪と云ふ竹藪を、學校の實習地として開墾してゐる時の事だ。五百子のこの壯舉に猜疑の目をさし挾んだ一部鮮人達の中では、

「これは、テツキリ、戦争の用意をしてゐるんだ——」

「しかし、あんな日本婦人一人に、つかはれてゐる男に何が出来るか。それに兵らしいものは何もゐないぢやないか」

「なアに、今に、あの學校が出来て終へば、澤山な兵隊が、あれを兵舎にして、乗り込んで来るんだ。それで、最初から兵隊をよこして、學校を建てたりなど出来ぬから、わざと女を頭目にして、よこしてゐるのに違ひない——」

「第一あの竹藪を掘り返してゐるのは、あれは、鐵砲丸除けを築いてゐるんだ——」

などと云ふやうな流言飛語が行はれ、それが段々一般的に昂じて来て、終ひには投石する者などが現はれたのだ。そして、それがいつ暴動化するかも知れない險惡な状態にまで迫つた事

などがあつた。それに、最初八人の一行で到着した五百子の一派が、後から後から船便のある毎に、大工、左官、井戸掘、桶屋、豆腐屋、傘屋等といふ鹽梅に、一隊又一隊と五百子のまごころに感激した人々ばかりが續々とこの日本村に參集してゐたのだから、さうした鮮人間の猜疑の目が五百子一派に注がれてゐたのも無理ならぬ事柄だつた。

丁度、その時は、兄の圓心は所用があつて内地へ歸つてゐた時だつたから、五百子は萬一の場合を慮つて女子供を木浦に避難させ、自分は職員と共に残つて、その時の防衛に當る覺悟を決めてゐた。

五百子の住宅は、學校の一部に構へられてゐた。そして、この住宅には温泉を設け小奇麗な浴室の設備もあつた。ついでに此の風呂の事では是非記して置かねばならぬ事は、例の親日派の觀察使尹雄烈氏は大變この浴室が氣に入つて、屢々入浴に來たとの事であるが、その來る時、氏は必ず輿に乗り笛を吹奏させながら十數人の從者を隨へて來るといふ豪勢さ……。そして、これを響應するに五百子は必ず立派な茶葉をもつてし、大いに雑談に花を咲かせた後、歸したといふ。

さて、五百子の事務所であるが、それは温泉の前の狭い庭だつた。そこへ卓子を持ち出して

事務をとつてゐたのである。

五百子は又温突の中に祀つてゐる阿彌陀如來や、父母の位牌に、かかさず毎日夕になるとおつとめの燈を捧げてゐた。

ある晩。五百子がおつとめの燈を捧げて合掌黙禱してゐると、突然戸外にバタバタといふ慌ただしい人の足音がした。

「先生、どうも町の方の様子が、今夜は特に可怪しいですぞ。どうも今夜あたり、やつらは襲撃して來さうですぞ」

青年の一人が、五百子の脊後へ浴せるやうに、突つ立つたままかういつた。さうして更に、「今も朝鮮人の信者から聞きますと、町のあの四辻を少し行つたところに、居酒屋がありませう。彼處で、二三百人も集まつてゐるのが、一日も早く、日本人をこの地から追つばらはないと、今に、みな殺しにされて終ふと、物騒千萬な事を言つてゐるさうです。これまでは、石を投げられる位でしたが、事によると、今夜あたりは、こちらにも、愈々刀を抜かにやアなりませんぞ」

と報告した。その中一人ふえ二人ふえ、五百子の周圍を青年達が十五六人も取圍んでゐた。それが口々にこのやうな報告をして來るのだ。これらの青年は、皆五百子を慕つて、その護衛に渡つて來た者ばかりなのだ。

「分りました。しかし、決して、こちらから手出しは、なりませぬぞ」

靜かに聞いてゐた五百子が、青年達の氣色ばむでゐるのを制するやうに、かういふと、すぐ後にゐる劍客の河原井に言つた。

「お聞きの通り、こちらから手出しをせぬやう、あなたから村一同へ、御注意下さい。しかし萬一の場合は油斷のないやうに——」

日 本 村 (三)

やがて、事務所前の狭い庭へ、村の者全部が集まつてゐた。身動きのならぬ有様である。それが、部屋を洩れる鈍いランプの光りで、ポーと、顔ばかり浮び出してゐるのだ。

その人の渦の中に一段と高く突つ立つてゐるのは五百子なのだ。日本から持參した石油箱の

上に乗つて皆を諭してゐるのだ。

「兄の圓心が不在故、私がお話します、明治十年西南の役が終つた秋、兄は釜山に渡つて來ました。本願寺の開教師として、兄はそれ以來、各地を布教して廻りました。口で申すとんでもないが、それは二十年間の長い間です。元山、仁川、釜山、各地に寺も造つてゐます。金玉均、徐光範、朴泳孝等朝鮮の貴族に、佛敎を吹き込むだけでも大した苦勞だつたのです。光州に日本村を建てて、私共がお百姓をし、朝鮮の方々にも日本の養蠶や、米の作り方を習つて貰ひ、住心地のよい村を造らうと考へ始めたのも、この兄圓心の因縁からです。そして、その因縁は皆如來様の御力でした。私達がかうして光州に極樂村を造らうとしてゐるのも、如來様の御思召しです。」

私達が一本の釘を打つにも、一本の竹を伐るにも、塊を打ち砕くにも、皆如來様がついておいでになる。私どものゐるところには必ず如來様はおいでになる。たとへこの地の土にならうとも、如來様は私共を御守り下さるのです。如來様は死ぬまで、私共と一緒にです。この事をどうか忘れて下さるな。監察使尹雄烈さんの御助力によつて、私共の建設仕様としてゐる光州の極樂村も、今やつと、その曙光を見かけてゐる時です——」

月のない眞つ暗な外闇へ、五百子の力強い聲は流れて行く。……が、竹藪の方に當つて、白い衣を着た朝鮮人の集團が、彼方此方に陰を投げてゐる。一同はそんな事とは少しも氣づかず五百子の爽やかな辯舌に聴き入つてゐる。

「私がこの光州に極樂村を打ち建てようとしたのは、昨年十月十四日の事です、その日私は、二人の人と京城から光州に來ました。風呂釜を馬に積んで來たんです。それが此の軒下にある事務所用の風呂です。京城から光州迄——この長い道中、随分苦難もありましたが、如來様は何時でも、私と一緒に下さつた。」

その日、兄は、光州西門外から馬で木浦へ出かけてゐたんです。私は京城から仁川に出て船で木浦に上陸したのです。そしてはからずも、路上で、私と兄は逢つたのです。兄は馬から飛び下りて私の手を握りしめました。如來様はこの朝鮮の荒野の果てでも、兄妹と一緒に下さつた——」

この時、突然材木置場の屋根にバラバラと石の礫だ。場の空氣が一瞬異様の緊張をみせた。

「今日御着きの方々、御驚きになる事はありません！」

五百子が大きく叫んでゐた。何故なら、本日到着したばかりの一隊は二十五六人もあつたからだ。五百子は直ぐ何氣ない調子で續けた。

「あれは、私達の事情を知らない朝鮮の人々が、思ひ違ひをしてゐるのです。しかし極樂村は如來様がおいでになる、この位の事でビクつく事はありません。ここに使命があるのです。本日御到着の方はまだ御存じないが、この村には大隈伯御寄附の農具がある。千把扱きのやうな道具は、朝鮮の人には珍らしい。いや、珍らしいばかりでなく、こんな便利なものを使ふ日本人と一緒に働いて、お國を富ませようといふ心を起してくれず、却つて、こんな便利なもので仕事をされては、朝鮮人の仕事がなくなるといふ、思ひ違ひをしてゐるんです。だが、これも時の問題です」

竹藪近くの白衣の集團は、次第に開拓された耕地に踏み込んで來てゐた。この集團を先刻から暗に監視してゐた日本人の一團が、實業學校の片隅に現はれた。劍客の河原井と配下の青年である。五百子は何事もないうやうに語り續ける。

「さあ、これで勢揃ひがすんだ。兄も間もなく歸つて來ます。さあ明朝から皆一緒に働きませう。私も脚絆がけで働いてをりますぞ。愉快ですぞ。日本から持つて來た蠶卵紙も間もなく解

ります。桑も芽を吹くでせう。無等山には茶の木もある。暖かくなれば茶摘みも出來ます。私も茶摘みの歌を唄ひますぞ。學校の教師方は授業が始まるまで、繩ないのお手傳ひです。それがすんだら又壁塗りのお手傳ひ、婦人方は明日から味噌搗きです——さあ、皆さんもうお寝みなさい。如來様も一緒にお寝みなさい——」

その時、又も、口を閉ぢたばかりの五百子の肩先へ、ヒュツと唸りを生じた礫の命中！同時にパラパラ、パラパラと激しい屋根の物音！

しかし、よろよろとした五百子は、ぐつと踏みとどまると、
「皆さん、私は、度々石の御馳走になつてをります。時々よい按摩を、石がしてくれるのです」

と、カラカラと笑つた途端、アツと百人の人が一齊に叫んでゐた。石がランプを打ち壊したのだ。火が發したのだ。騒然たる物音を突き破つて、五百子の叫び聲！

「早く砂をかけなさい、硝子に氣をつけなさい、大丈夫です」

狭い庭に、無氣味な緊張と人々の摩擦する騒音が漲つた時、ギラギラと闇に抜刀を輝かせながら何事かを聲高に争ひつつ入つて來る一塊の人々があつた。劍客の河原井が配下の青年を押

しなだめながら來たのだ。河原井が來るなり言つた。

「奥村先生、當夜の人数は、二百人以上はありますが、やはりいつもの如く、石を投げる程度です、しかし若い方々は、この毎夜の襲撃に、指を咬へてゐられない、斬り込むといふのです先生御指圖を仰ぎます——」

「血をみれば事業はお終ひです。負ける事の嫌ひな私が、我慢してゐるんです。斬込む時は、五百子が先陣ですぞ」

礫が又々屋根を掠めた。壁に不安な音が突入する。が灯が點いた。たれかの手で蠟燭が點つたのだ。風にゆらめくその灯影に五百子の姿が浮んだ。彼女は闇の裡にも温突の佛壇に合掌黙禱してゐたのだ。

曾て、帝劇で「奥村五百子」を上演中、奥村家から種々な遺品を借り出して來て、それを陳列した事がある。その中には、宮殿下からの賜物を始めとして、女史の筆蹟や動記や、御下賜金拜文の電報や、近衛公からの賜物である衣裳やら、佛像、短刀、書簡等々いろいろあつて、私の書簡までも陳列されてゐたが、近衛公の書狀の終りの左の一節を参考のため茲に掲げさせて貰はふ。

——およそ危険を冒して大事業を遂げんとするものは、所謂安心立命といふ事大切なりと思へば、言葉をなさぬ腰折れなれど君が馬のはなむけによみて送る。

法の道ふみたがへずば奥ふかき

とりの林もやがてひらけん

これは即ち、公が女史の朝鮮進出に際して其の門出のはなむけとなされた歌である。此の他大谷句佛師の書簡や私の歌などもあつたが、これは省く。

かやうに兄妹の辛苦艱難にも拘らず、この光州の經營も十分の運びに至らず、それから間もなく、圓心師が又本山の命によつて、今度は千島の布教に向ふ事となつたため、非常に健康を害してゐた五百子も亦、後事を同志に委ねて一時此處を引き揚げる事となつたのだ。この間の消息は、次の長岡外史少將の手紙によつて概ね知る事が出来ると思ふ。

拜啓仕候、爾來御容態如何候哉、御體養專一に奉存候、急ぎては事を仕損ずる譬へも有之候へば、十二分御加養專一と奉存候、先便にも申上候通り、小生今度の歐行に付ては半日小笠原子爵と後事に就いて熟談、小生の代理者として軍事課々員立花小一郎君を依頼仕置き候陸軍省にて拜眉の節、向後全州へ着手の件は、貴女史御病氣上如何と相考へ、又輕重大小較

量の上、小笠原子爵、本願寺谷了然師とも熟談の上、全州方面は暫く後廻しとし、外務省の意向を確めたる上、舒々着手の事と致度と奉存候。貴女史御病氣御平癒に相成候はば、朝鮮方面よりも寧しろ南清地方へ御盡力、爲國家必要と愚考仕候、尙且貴女史御病氣上にも好都合と奉存候。委細は小笠原、谷、兩先輩へ小生の心事相話置き候間、御序を以つて御聞取被下度奉願上候。

海上頗る平穩當地着、御縁邊なる長谷川君に、兩晩御介を辱ふせり、奇遇に御座候。

九月八日

頓首敬具。

於香港三井物産會社々舎

長岡外史

奥村女史殿侍曹

日本村 (四)

光州の日本村は、産業的にも對外的にも國家百年の計として足場を作つておかねばならぬと

いふ五百子の遠大な考へから出發したのであつて、一番力を入れたのは近衛篤磨公だ。次いで東本願寺の新法主大谷光演師と長岡外史氏、堀内文次郎氏、それに私だつたと世上に傳へられてゐるが、それはとにかく、この日本村も随分資金には苦しんだのである。

その朝鮮に始めて踏み込み、京城の公使館に入るなり、

「月給ばかり澤山とつてゐながら、破れた國旗を掲げてゐるなどは、なんたるザマだ。早く國旗を取り替へなさい」

と、怒鳴りつけ、ポロポロになつてゐる日の丸の旗を取り替へさせたほどの女史であるが、全く、この日本村の資金難にはギウギウいつてゐたものだ。

だから、京城の公使館を通じて外務省の機密費から月に三百圓つつを學校の經營費として補助を受けてゐたのが、その翌年から支出されないといふ事になつた時など、五百子は朝鮮から飛んで来て、早速近衛公に縋らうとしたが、この時は、五百子一人では何を言ひ出すか分らないといふので、東本願寺の石川舜台と云ふ人が心配して、南條文雄師を介添へにつけてやつたものだ。

近衛公は一夜、五百子を議長官舎に呼んだ。この日、同席した人々は、陸軍では長岡外史、

堀内文次郎、海軍では出羽重遠と私とであつた。その他五百子の事業に同情をもつてゐる人々が相當に招かれてゐた。介添への南條文雄博士は、本願寺の長老で、殊に五百子の兄圓心とは明治四年以來の交友だつたので、五百子を案する餘り、兄圓心に代つた氣持で、

「今夜は、いつもの奥村さんではいけませんぞ、大切な晩ぢや。女になつて、恐れ入つてお願ひするんですぞ」

と、途々くれぐれも注意して來たといふ。

ところが、近衛公が、食事中から「これはむづかしい問題だ」と暗に五百子の要求の困難な事を仄かしてゐたものだから、すぐその言葉の裏を敏察した五百子が、南條師の注意など何處かへ打忘れ、例の單純な猛々しい感情の五百子となつて終ひ、愈々これから別室で相談といふ段取りとなつた時、突然、五百子が正座に着いたかと思ふと、

「ここでは私が一番年長故、失禮します」

と、ストーブの前の椅子に深々と腰を下し、脊中あぶりを始めたのだつた。

そして、公爵が、

「いろいろとお話は聞いたが、どうもこの問題は、むづかしさうぢやのう」

と言ふが早い、もう五百子の口からは火のやうな言々句々が迸つてゐた。

「なんでもない、何がむづかしいのです。公爵、あなたが、外務大臣へ一本御手紙を書いて下さらば、なんでもないことです」

「わしは貴族院議長ぢや、外務大臣に命令が出來ると思ふか」

「そんなつまらぬ議長なら、ここで今直ぐ辭表をお書きなさい。總理大臣に私が届けて上げますから」

「何をいふ」

近衛公にも少し酒氣があつたので、ついこんな應酬となり、五百子は愈々猛るばかりとなつた。どう言つてもきかばこそ、たうとう終ひには公に飛びかゝりさうになつた。

が、かうなつてくると流石に近衛公は可笑しくなつたと見え大笑されて終つた。五百子も思はず手を引きこめてゐた。列座の人と思はず笑つてゐた。五百子も笑ひ出してゐた。

實際あの時の五百子は、大真面目でカツと上氣したらしかつた。近衛公は柔道も出來た人だそんな人に女の身で此處まで上氣するほど、それほど日本村の資金には五百子は窮してゐたのだ。

それに光州の氣候は、五百子には不適であつて、度々氣管支カタルを患つてゐた位だつたがそれでも五百子は病氣などに屈せず活動してゐたのである。

鯊が好きだつたけれど肝腎の酢がないので、ザクロの實を絞つて酢の代りにしたといふのも此の頃の事であつた。

また――

明治三十二年の正月の事。突然、朝鮮から丹頂の鶴を土産に私の玄關へ表はれたのも此の頃である。

五百子は、丁度その前年から、私の妻が初の懐妊といふ事を聞いて、屢々手紙で何かと親切に注意やら見舞をしてくれてゐたが、その鶴の土産も、

「鶴一羽を、懐妊の女が一人で、食べて終へば、お産が軽くなるといふ事を、聞いたから、持つて來たのです」

と、さういふ話なのだ。そして、妻に向つて、

「さあ、これを一羽、食べてしまはれるのを見ぬと、安心して、朝鮮へ歸れません」といふのだ。

わざわざ海越え山越えて、その爲めにかうして持つて來てくれたのかと思ふと、その親切は身にしみて嬉しかつたが、それからといふもの、毎日三度々々の食事に鶴の肉を妻に勧めてゐた。それが大分長い間である。妻も勿論その親切にほだされて、喜んで食べてゐた。だから今でも妻は、その時の鶴の足で記念に作つた筈を大切に持つてゐる。

「やれやれ、これで安心しました」

と、一ヶ月目に、五百子は、さつさと引揚げて行つたが、舊藩主であるといふだけで、五百子が、私達一家の者に、つくしてくれた厚意は、こんな一つ位の事ではない。書けば幾等もあるが、これがまあ代表的な話の一つである。

南船北馬 (一)

明治三十二年七月十八日。五百子は思ひ出多い光州を引揚げ東京へ歸つて來た。その頃東本願寺の新法主大谷光演師は淺草東本願寺に住んでゐたが、五百子を招いて、その勞を慰めるため手厚い饗應をした。

その月二十一日——

五百子にとつて、思ひも設けぬ光榮が待つてゐた。東伏見宮（當時は小松若宮）妃周子殿下より、侍講杉山令吉氏を私の宅へ遣はされて、二十三日に、五百子を同伴して參殿せよとのありがたい御詔だつたのだ。

その朝、五百子は恐懼して奉伺すると、妃殿下には拜謁を賜はり、前後三時間に渡つて朝鮮についてのいろいろな事情を御奉答申上げた。そして、妃殿下から、更に、

「婦人の身を以つて、遠く韓國に赴いて布教し、また彼の國民に農蠶を勧め、かねて日本村を建設するなど、その功績は誠に賞すべきもので、この上とも身體を大切に、國家の爲めに

盡すやうにいたせ」

との、身に餘る光榮の御言葉を拜したのだ。

五百子は感泣して御前を退り、次室に控へてゐると、妃殿下にはまた老女をして、

「今後も暇ある時には、御伺ひ致すやう」

との御言葉を賜つた。

そして、越えて八月五日には、又々重ねて御召しに預り、數々の御下賜品や、辱けない御言葉があつた上、

「都合のよい時に、岩倉家（妃殿下の御生家）を訪ねて、朝鮮の話を致すやう——」

といふ意外の御言葉に接し、五百子は感激の涙を湛へながら御前を退下した。

それから、三日後の八日——

五百子は専心身の靜養を祈願しながら郷里唐津に歸つて行つた。ところが九月七日に、又もや私の家へ、宮家から侍講を遣はされ、五百子の病狀を問はせ給ふた上、

「なほ宜しく無いなら、上京致させてはどうか。宮家でベルツ博士の診斷を受けるやう取計つて遣はさう」

といふ勿體ない御思召の程を傳へさせ給ふた。私は感泣しながら早速この思召を五百子へ手紙で知らせる事にした。

五百子は、私の手紙を見た時、それを押し戴いて、咽び泣きながら、

「この身は國家に捧げた身體、どうなつても構はないけれど、このやうに有難い御誂を拜しては、死ぬにも死なれぬ」

と言つたといふ。

十月十七日、五百子は藥瓶携帯で上京して來た。丁度この頃は、もう南清布教視察が内定してゐた時で、大谷法主は五百子の着京を待つてゐた。

その月の二十九日に、閑院宮殿下よりを光演新法主へ、

「五百子同道參殿致すやう——」

といふ御内命があつたのだ。

新法主が五百子を同伴して伺候すると、殿下には妃の宮と御揃ひで拜謁を許され、いろいろと有難い御言葉の上に御下賜品まで賜はり、五百子は、只々恐懼感激して御前を退下したのであつた。

更に翌月十二日には、また東伏見宮妃殿下より拜謁仰せつけられ、あまつさへ御親筆の色紙まで賜はつた。

ますらをも及ばざりけり國のため

こころつくしし君のまことは

これが其の時の色紙の御歌であるが、これを拜した五百子は、一言も言ひ得ず、ただ感泣に身を打ち震はしてゐただけだつた。

南 船 北 馬 (二)

明治三十三年一月十七日、五百子は病體を押して南清視察の旅に上つた。この南清視察が此處まで運んだのは、長岡少將の力添へといつていい。

五百子が長岡少將と面接したのは、日清戦役直後で、宇内に諸種の事業熱が勃興してゐる時だつた。唐津灣を築港して軍事上の要港とするやう、五百子がその請願に參謀本部へ少將を訪問した時に始まる。少將は此の時、五百子の風采を一目見て、これは女ながらも働ける人物だ

と観てとり、遂に肝膽相照らす仲となつたのである。

さきに、少將は東本願寺の光州布教については大いに盡すところがあつたが、事業の實績は短時日の間に求める事が出来ないのと、一つには、この地方の氣候が、五百子の健康に不適當だつたので、五百子に對しては寧ろ他の新天地を興ふべきだと考へ、南清開拓を勧める事にしたのである。そこへ歐洲漫遊から近衛公が歸朝されたので、公とも相談して總ては決したのであつた。

そして、幸ひ氣合してゐた郡司大尉の紹介で、東京愛住女學校長の小具貞子が五百子と同行する事となつた。それに長岡少將自身も丁度この頃、ドイツへ留學する事となつてゐて、私が挨拶のため陸軍省へ出かけて行つた時、五百子のために、少將は今後の事業について種々その意中を語つたものだ。

當時、日本婦人は、南清方面に一人も行つてゐなかつた。で此の方面の支那婦人と交際を結び、一つには日本婦人を彼等に知らしめ、また一つには彼等の内情を探つて日本佛教の宣布をしようといふ一石二鳥の狙ひであつた。

一體五百子の持病である氣管支カタルには、南清の溫暖地は詭へ向きの保養地で、五百子に

とつては一石五鳥ともいふべき事で、長岡少將のこの意見は、私も双手を舉げて賛成した。東伏見官家からは有難い御誼を賜はつてゐる事だし、私は早速五百子に上京を勧めてやつた。

五百子は私の手紙で直ぐ上京して來た。南清視察の話が出ると、五百子は、

「國家に捧げた身體、一身の都合で躊躇してはをられませぬ」

とて、持前の氣性で決心を固めると、ひたすら健康恢復に勉めてゐた。

愈々南清の旅が決定すると、五百子は一先づ唐津に引揚げ、後事を保利文溟と宮崎雅香の兩氏に頼み、三十三年一月十七日郵船で門司から上海に向けて出發した。一行の中には小具貞子の他に愛婿山田節太郎も加はつてゐた。

五百子は此の壯途に當つて、澤山の驢を受けた。大谷光演師からは、次の三句――

梅檀の枯れても残る聲かな

ちりてこそ我日本の櫻かな

散る時が浮ぶ時なる蓮かな

下田歌子女史からは――

日の本のまことの種子をもちこしの

原にも植ゑよ大和撫子

といふ一首の和歌を書きつけられた信玄袋を贈られてゐた。

近衛公夫人からは、桂掛一首、紅梅上衣一着、檜扇一個を拜借してゐた。これは若し彼の地の大官や紳士の召待を受けた時、日本婦人固有の服装を見せてやらうといふ五百子らしい心構への結果からであつた。

責任感の強い五百子としては、この度の旅行が如何に並々ならぬ旅行であるかをよく考へてゐた事であらうが、その心中を思ふ時、私は全く悲壯の感なきを得なかつた。

駄足ながら、その時、私の贈つた一首を掲げさせて貰ふ。

ゆけよ君すめら御國に照る月は

から山かけてすみわたるらん

南船北馬 (三)

明治三十三年一月二十二日――

五百子の一行は無事上海に着き、更に二月四日の便船で福州に着いてゐる。そして約二ヶ月この地に滞在して三月二十六日厦門に渡り、四月三日同港と發して、五日午後上海に歸着したが、この間に各地の産物や、女子教育の状況や、布教の方法などを視察研究して、その新知識を獲たのである。

茲に五百子からの通信の一二を記して、その説明の代りとしよう。

(前文略) さて當地へ参り、種々清韓兩國の事を耳にいたし候時は、齒がゆき事のみに御座候間、どうぞどうぞ議會閉會の上は、相成るべく早々朝鮮へ、巡廻被下度願候。降て私共一行は、來る四日の便にて福州に入り候間、左様御承知の程願上候。云々。

二月一日

奥村 五百

近衛 公

(前文略) 私共福州出立つ儀、豫定と異り船の都合殊の外あしく、遂に去月二十四日を以つて同所を出發、同二十六日朝無事厦門に到着致し候。

此の行は豊島福州領事、後藤民政局長官出迎ひの爲め厦門まで参られて、圖らずも同船出

來誠に都合よく參られ候。此處から馬尾と申處までは、福州より門口の流を下る事十哩も有之候て、此處に本船碇泊致居候、此の附近は潮流の工合、風浪の加減にて殊の外危険の場所に候。尙且つ別仕立の小蒸汽船にて、豊島領事並に私共一行、午後五時福州出發、同七時頃馬尾附近へ參り候處、兼ねて吹きすさびし風に、横浪を受け小蒸汽船は一上一下、潮水に浸されける事數々、あわれ今一回にて福州領事と情死を演ぜんとは五百子の愚痴、その日同じ死すならば、かかる濁水に入らで、泪羅の如き清水にとて、歎ぜしは貞子の愚痴に御座候。遂に福州領事の周旋にて、シヤンハンを雇ひ、尙風浪を犯して漸く、ハンチャン號に乗り移り、それより海上はさしたることもなく、厦門着後、船の都合にて滞在數日に相成度間餘日を以つて漳水をも視察し參り候。同所は別に御命令は無之候へども、布教上視察致し置き候はば、餘程の益にも相成るべきかと、奮發致し參る事に取極め候處、福州領事も、後藤長官も來厦にまだ餘日も有之候へばとて、遊び乍ら同行致呉れ候。同所に二泊致し歸厦後、丁度後藤長官も來厦致され候。領事館に於いて面會致し候。而して去る三日午後四時厦門出發同五日午後九時半上海へ着致し候。然しながら上陸の都合にて、十一時頃漸やく當別院へ着致し候間、左様御承知被下度候。

却説、朝鮮實業學校の儀につき、色々御差圖に預り、御蔭を以つて殊の外好結果に相成候御嬉敷ここに滿腔の喜悅を以つて御禮申上候。尙此の上とも宜敷願上候。云々。

四月七日

奥村五百
小具貞子

近衛公

一旦上海に歸つた五百子の一行は、それから更に蘇州、杭州を廻り長沙沿岸を視察しながら南京に入つたのである。

時恰も、北清に義和團事件が勃發し、その軍勢が南方にまで、波及して來たので、やむを得ず南京から上海へ引き返し、一應歸國する事と決めたのである。

そして、その歸途、朝鮮に寄つて京城の名士を歴訪したが、六月四日に縁りの深い光州の地に入ると、自分が苦辛の結晶たる實業學校を視察して、一ヶ月ばかりを此の地に逗留し、後木浦を経て再び釜山に來た。そして、釜山から、五百子一行は軍艦官古に便乗して、明治三十三年六月二十七日、恙がなく佐世保へ歸着して來たのであるが、この官古便乗については、俠雄として有名な八代六郎大佐との面白い掛合ひがあつた。

南船北馬 (四)

初め、五百子は釜山から歸國する豫定であつた。ところが船が三日後でないと來ない。ぢりぢりしてゐるところへ、丁度、軍艦官古が入港したのだ。艦長は俠雄艦長の綽名で通つてゐる八代大佐だ。

八代大佐は、上陸して日本領事館を訪づれてゐた。そこへ運よく五百子が行き合した。八代大佐は、私の紹介でかねて五百子とは懇意の仲であつたから、

「やあ、奥村さん、御苦勞です。南清視察だつたさうで。御疲れでせう」と、極めて安易な調子だ。

「はい。今歸り途です。ありがたうございます。御見かけ通りお蔭様で、こんな元氣で歸つて参りました」

かうした二人の會話は、そこに居合してゐる領事館の人々や、五百子の同伴者である小具貞子や、その他いろいろの人々の中で、生々と輝くやうに交された。

「全く、あなたの事を思ふと、男子顔色なしです」

それから一くさり五百子の視察談に花が咲いてから——八代大佐が、

「で、奥村さんは、いつここを御立ちですかな」

と訊いた。そこで五百子が、これ幸ひと、

「それよりあなたの、宮古艦は、これより何處へ行くのですか」

「明日佐世保に歸ります」

「佐世保！」

「さうです」

「これは幸ひだ、八代さん、私を軍艦に是非乗つけて下さい。さうして、佐世保迄送つて下さい」

八代大佐は、この唐突な言葉に、五百子の顔をしばらく見つめてゐたが、やがて、微笑する

と、

「婦人を軍艦に乗せるなんて、そんな亂暴な事は、出來ませんよ、ハハハ」

「しかし、便船は三日後でないと、ないのですから」

「そんな無理をいつても——」

「日本の軍艦に、日本の婦人が乗るのに、何故無理です」

「無理です。なんほ懇意でも、こればかりは、私が艦長として許せません」

「どんな事があつても——」

「仕方ありません」

すると五百子は、懐中から一封の書状を取り出して、それを艦長の面前に突き出し、

「これでも許せませんか——」

艦長は意外な面持して、開封した。それは時の海軍軍令部長海軍大將伊東祐亨の手紙だつた。

拜啓陳者、肥前唐津奥村五百子は眞宗大谷派の熱誠なる信者にして、數十年來、千辛萬苦を積み、國家に盡瘁候事不尠、兩三年前より更に韓人感化之目的を以つて、奮然渡海し、光州に於いて實業學校を創建し、懇諭善導、着々其の效を奏し居候。就いては萬一同人此の手紙持參の上、軍艦に乗込みの儀願出候節は特別の便宜を與へられ候様、公望致し候也。

明治三十二年二月八日

海軍大將子爵 伊 東 祐 亨

在韓帝國軍艦諸艦長殿

讀み了つた八代大佐は晴々と言つたのだ。

「えらいものを御持ちぢや。よろしい、明朝六時に乗込んで下さい。同行の小具さんもよろしい。しかし、奥村さん、こんなものを用意してをつて、あんたも人が悪いなあ」

室内は朗らかな笑聲に満ちた。

翌日、釜山を後に軍艦官古は佐世保に向けて出帆した。俠雄艦長八代六郎大佐と、一代の女傑奥村五百子の艦上の對話は、實に劇的なものであつたらう。

五百子は、この僅かな日程航海中に、水兵を甲板に集めて、南清視察談を行なつた。講演の進むにつれて、五百子の言葉は次第に熱を加へて來た。聲を勵まし、手を打ちふつて、御國を説き、支那を憂へ、東洋の危機を戒しめ、帝國の使命を絶叫し、阿彌陀佛と俱にある者は死を怖れず、信念に生きるものには永遠の歡喜がある、歡喜があれば元氣がある、元氣は國の基である——と若い水兵達の血汐を湧きたたせた。

第一聲 (一)

明治二十七八年の日清戦争は、我國の勝利となつて、支那を、それまで眠れる獅子といつてゐた歐洲の各國が、急にその肉を殺ぎとり始めたのだ。ドイツの膠州灣租借が手始めで、ロシアの旅順、大連——イギリスの威海衛——フランスの廣州灣——といふ鹽梅に、皆租借といふ名義で、それぞれ分割させてしまつた。

かうした白人の横暴に憤激して起つたのが所謂——義和團である。彼等は北京駐在の外交官を殺戮し外人居留民を包圍した。で列國は直ぐに出兵した。日本も亦軍を派遣せねばならなかつた。これが明治三十三年五月から十二月に至つた、北清事變である。

丁度この頃、南清視察から歸つた五百子の報告會が近衛邸で開催された。その席上、この北清事變の派遣軍に對する東本願寺よりの慰問使派遣の事が問題となつた。五百子の主張は、東本願寺の連枝大谷勝信師をもつて慰問使の最適任者だといふのであつた。そして、本山寺務局に多數の反對者があつたのに、たうとう彼女は押し切つて、それを實現させて終つた。

五百子は此の時、大急ぎで唐津に歸ると、ひそかに後事を又々保利、官崎の二氏に託しておき、單身朝鮮視察といふ名義で京城に直行し、仁川へ先廻りして、この慰問使の連枝一行が到着するのを待ち受けてゐた。そして一行が着くと、彼女一流の調子で、

「とかく長途の旅には、女が一枚加はつてゐないと、何かと不便なもの故、是非私を同行させてください。南清、中清を踏破して來た身體、決して、皆様の手足纏ひにはならぬし、殊に人情風俗の違つた北支の戦野に行くのだから、南清でも一度行つて來た私の經驗は、必ず何かの御役に立つ事です」

と、説得に務めた。

その熱意は、例によつて非常なものだつたと見え、勝信師も、それでは——といふのでたうとう連れて行く事とした。

そこで、十月十日、五百子を加へた此の一行は仁川を出帆し、芝罘、太沽を経て塘沽に上陸し、十五日汽車で天津に着し、領事夫妻の懇ろな待遇を受けて、翌日は天津から二隻の小舟に分乗して二十日通州へ着。更に通州から北京へは、連枝勝信師と南條文雄博士の二人が籠に乗り、その他は皆馬車で、二十一日午後四時過やつと北京に到着したのであつた。

この日、五百子の乗つてゐた馬車の中々着かないので、非常に皆が心配して待ちあぐんでゐるところへ、ガタリガタリと遅れ馳せながら到着したのが、それも空車だつた。で一同は一層不安にかられて訊いた。すると馬夫は呑気な顔して、お客は途中で下車したといふ。不安は更に募つた。そこへ五百子が杖をたよりにやうやく着したといふ話もある。

この晩、北京附近の日本軍の間では、

「けふ高粱畑の丘の上で、両手を高く舉げて、盛んに日本軍萬歳、日本軍萬歳と叫んでゐる日本の女をみたが、こんな戦争の直後に、こんなところで、日本の女をみるなんて、どうも俺は怪しい氣がした——」

と一人の兵が語出したのがもとで、

「さうだ、俺もみた、俺もみたんだ。しかし全く、嬉しいといふより不思議な氣がして、信じられないので、俺の錯覺だらうと思つて、黙つてゐたんだ」

「いや俺も見た。全くおかしい」

と——かういふ大評判が起きてゐた。

それこそ、五百子が徒歩で来る所、日本兵を見て感激のあまり叫んだ赤誠の逆りだつたのだ

が、戦争直後の事で、女はおろか、まだ北京の内外には日本の男子でさへ單獨で散歩さへする者の無かつた折柄である。兵隊達が無氣味にも思ひ不審にも思つた事に無理はなかつた。

きび畑の中わけ行くや唐の旅

五百子が、この時の實感を詠んだ句がこれである。

その前——

五百子は天津から通州に行く舟の中で、南條博士を向ふに、次のやうな議論をしてゐる。

それは一行が、黄濁たる白河の緩かな流れを、小舟で漕つてゐる時、糜爛した支那兵の死體が、水の間に間に漂つてゐた。そして直ぐそのそばでは、忠勇なる我が駐屯兵達が、その水で米を洗つてゐたのだ。五百子はこれを見るなり言ひ出したのである。

「南條先生、御覽なさい。日本の兵隊は、こんな水で御米を洗つてゐました。こんなにまでして、御國のために一身を捧げて、戦つてくれてゐるのです。どんな感謝の言葉をもつてしてもこれに酬ゆる事は出来ません。まして、戦死者や病死者に對しては猶更のことです。國家が勳章や遺族扶助料を出してゐるからとて、それだけで、私達は知らぬ顔してゐて、いいでせうか。せめて遺族に對してなりとも、もつと感謝の誠を表はす何等かの方法が、なくてはなりませんま

い。私がこれまでも度々申上げた通り、ですから一刻も早く、軍人後援の方法を講ずる必要がありませう」

かういふ言葉は、一行が仁川出發以來、屢々聞かされてゐた事であるが、五百子は、この北清駐屯軍の現状を目にして、一段とその決意を固めたいのだ。

そしてこれが愛國婦人會設立の第一の動機となつた事は、當人も屢々歸還後によく話してゐたところだ。

通州視察の時にも、五百子は大きな衝撃を受けたのだ。それは多數の支那婦人が、團匪のために凌辱されてゐた事實である。そしてこの支那婦人の凌辱事件は團匪が逃げ去つた後にも、度々列國駐屯軍兵士によつて行なはれてゐたもので、それを目のあたりに見た五百子としては、大きな溜息を吐いていふのだつた。

「御氣の毒な支那の婦人よ、戰敗國の婦人よ——國が破れてどうして女の貞操が、保護出来るでせう」

五百子は、さうした女性の死體を見ると、とめどもなくはふり落つる涙を拭ひもせず、かう言ひながら必ず合掌して回向をしたものだ。

「我々は軍人に此の身を護つて貰つてゐるのです。我が身が可愛いけりや、もつともつと軍人に感謝してよいでせう」

これは、北清慰問の旅から還つて來た五百子が、私どもにも度々言つた言葉だ。と同時に、この氣持が、愛國婦人會設立の第二の動機でもあつたらうと思ふ。

第一 聲 (二)

話は、また前の事になるが、一行が最初天津へ到着した時の事である。

一行は領事館を訪ふた。その時、領事鄭永昌氏の夫人はま子が、連枝大谷勝信、南條文雄二師を始め多くの名刺の中から、奥村五百子の名刺を見て何よりも喜んだといふのだ。

「ほんとに、あなたの名刺を見た時、私はハッと致しました」

打ちくつろいでから、夫人は馴々しく、全く母親にでも對した時のやうな調子で言つた。五百子が稍々不審に思つて、そのわけを訊くと、夫人はニコヤカに笑ひながら、

「かねがね、奥村五百子といふ怖いお婆さんがゐると聞いてゐましたが、その名刺が不意に、

突き出されたのですもの——」

二人の女性は、そこで思はず笑つた。異郷にあつて相會ふ同性である。而もはま子夫人にとつては、義和團の包圍で永い籠城をした後の事である。

食事の後、一行は案内されて、その義和團包圍の慘過の跡を見廻つた。

はま子夫人は、一巡後、五百子に語つた。

「突然この領事館の庭へ、日本の水兵が来たものですから、愈々戦争だと思つて、すぐ生家と親戚へ手紙を書きました。間もなく大砲を打ち出しました時、フランス領事館へ行つてゐた主人が、歸つて來ましたが、日本の婦人子供は、英國の工部局が居留地にあるのでそこへ避難させました。そして私は、館員の奥さん方や、床屋さんや洗濯屋さんなどの婦人の方々と共に行きました。夕方の事です。穴藏のやうなところで、灯も點けられないのです。しかし、持つて行つた握飯を一つづつ、手探りで分けて、夜を明かしました。習日、私は屋上へ出て、見ましたが火事と大砲の火と、支那の勢ひのいい兵の姿位で、他に人といふ人の影は見えません。その中、領事館からは、召使が皆逃げて、食べるものがないといつて來ましたから、私はすぐ歸り、習日又主人と工部局に參りました。この工部局が最後の場所だといふ事なのです。」

私は又、食事の世話をするために、領事館へ歸りましたが、負傷兵は、だんだん増えて來てゐます。それでシツカリした婦人を頼んで、工部局の避難所から來ていただき、軍醫や看護卒に訊きながら、手當をしました。蠅が多くて不潔でせう。全く蠅を逐ふだけで、ヘトヘトになつて終ひました。大砲や鐵砲の彈はどんどん飛んで來ます。食事は、部屋の隅でして、三度々々お粥と梅干ですませました。イザ火事だといふ時の立退きの支度もしました。又萬一の場合侮辱を受けない爲め、皆さんとお話して、各々短刀を肌身離さず用意してゐました」

黙々と聽き入つてゐる五百子の手には、念珠がつまぐられてゐた。

「その中、本館に砲彈が命中し出したのです。あの通り、天井も壁も、痕だらけでせう。私達は負傷者と、この中であるのです。その中、運よく船便が出來て、婦女子や負傷兵を歸國させる事となつたのですが、それで女は私一人になりました。ただ一人、郵便局員の奥さんで臨月だといふ妊娠中の方が一人ゐらつしやいましたが、産所にも困るしどうにも出來ない。彈丸はもうどの部屋へもドンドン來ます。しかしこの方は氣丈な方で、どうなつても踏み止まつて御國の爲めに働くと仰有る。そこへ博愛丸が入港したから、これ幸ひと歸國を御勧めしましたが、頑として聽かれませんか。それをいろいろといつて、やつとの事で、歸國して貰ひました」

五百子の目から、時折、ポトリ、ポトリと大きな露の玉が落ちてゐる。

「たうとう領事館も、爆裂弾で火災を起して終ひます。兩陛下の御眞影と大切な書類を二階へとりに行かうとしてゐますと、皆さんが引きとめるのです。しかし、神佛の加護を常々信じてゐます私は、かういふ時こそ、それが現はれるものだと思つて上つて参りました。やつとの思ひで御眞影を奉安して、ほつと一息ついてゐると、又ドカーンと目の前に落つこちて來ます。幸ひ怪我もなく別室へ避難しましたが、こんどは大震動です、まるで大地が裂けるやうなので、こんどこそ駄目だと觀念して、死んだつもりでをりましたが——ふつと人顔を見ると、死んだつもりで自分に、その顔が見えるのです——」

五百子が思はず、ここで聲を出してゐた。

「奥さん、神様や佛様は、いつでも私達と一緒にゐて下さるのです、そこです、信仰です。尊い御經驗です、もつたない事です」

「本當にさうだと思ひます——その大震動は火藥庫の爆發だつたのです。こんな御話をしてゐると際限ありませんが、避難者で半焼の此の領事館も一パイになるし、その混雜たらありませんでした。——でも私は、死ぬものと覺悟してをりましたから、怖いともなんとも考へませんでした。」

でした。お氣の毒なのは軍人方で、その御苦勞は、口では申されません。殊に負傷兵の苦しむ有様はたまりませんでした。それでも軍人の本分は忘れないで、やつてしまへとか、兄さん、お母さんとか、呼びつづけてゐらつしやるのです——」

間もなく、天津では戦死者のため盛大な法要が営まれる事となつた。その多くの戦死者の墓碑の前へ、毎日二人の女性が現はれて、一つ一つにぬかづいてゐた。いふ迄もなく、五百子とまは子夫人だつたのである。

かうした同胞の勇敢にも苦慘な物語を耳に收め目にしながら、とにかく北京に着いた一行は先づ日本公使館に西公使を訪ね、その紹介で派遣軍司令官山口素臣中將と福島安正中將に面會して慰問の辭を陳べると、ここでも多くの戦歿勇士の追弔會や傷病兵の慰問を終へ、愈々歸朝の途に上つたのだつた。時に十月二十七日の事だ。

それからの過程は、通州より再び天津に來り、十一月四日に天津を出發して、營口、芝罘を経て、二十七日無事仁川に着いた。

ここで一行は大谷派別院で休養すること三日、十二月一日仁川を發して京城に入り、四日韓國皇帝に拜謁して、七日又仁川に戻り、十日居留民區役所に於いて南條博士の講演會を開いた

のである。

この席上五百子も演壇に立つて一條の視察談を試みてゐるが、この時の演説こそ、五百子にとつては、愛國婦人會創立の第一聲といつていいものだつたといはれてゐる。聴衆は全くこの時一言一句、この感激性の強い一女性の肺腑から搾り出されたやうな、生々しい戦跡の視察談に、釘付にされたかのやうだつたといふ。

それから、五百子は、この仁川で一行と袂を別ち木浦を経て釜山に來たが、そこでも領事夫人能勢錦子の請ひで、再び仁川に於ける時の講演を繰り返し、ここでも大變な感銘を興へてゐるのだ。

熱誠譜 (一)

北清派遣軍慰問から還つて來た女史は、先づ近衛公爵と私を訪づれ、その報告と共に軍人遺家族救護事業の必要を力説してゐた。私は勿論、近衛公爵も大賛成であつた。實にその時は熱のある話しぶりで、流石に男まさりの五百子の面目が躍如としてゐた。

間もなく、東伏見宮（當時の小松若宮）同妃殿下と、閑院宮妃殿下の御召しを辱うして、北清の模様や、帝國軍人救護事業の必要や、婦人がこの種の事業に最適任であると考へてゐる事等を逐一申上げ、これまた御賛同を得たのであつた。

そこで、愛國婦人會創立の下相談が、近衛公の斡旋によつて急速に出來、明治三十四年二月二十四日、麴町區平河町禮法講習會所にその發起人會が開かれ、近衛公が座長となつた。その時、世間へ發表された趣意書は、

愛國婦人會趣意書

掛巻も長き吾が皇國の御楯となる軍人たち、戰場に臨みて、或ひは彈丸に碎かれ、或ひは瘴氣に斃るるに當り、是の國民として其の功に報ゆるには、自づから種々の方法あるべしと雖も、生計困難なる遺族の救助こそ、最も先にすべきものならぬ。抑も我が帝國、嚮に征清の役あり、去夏復た兵を北清に出たしに、忠勇義烈の軍人は、命を鴻毛の輕きに比して、雨なす彈丸の下に、身を抛ち、劍なす氷の床に夜を守り、名譽の戦死を遂げ、不起の病に罹り、異域の鬼となれるものも果してそれ幾ばくぞ。されば公けにも深く之を憫みおほして、つぶさに救護の道を盡させ給へり。然れども救ひの手には限りありて、救はれ人は數限りもなし、あはれ頭に霜を戴ける翁の、子を先立てたる、這ひるざりだにしあへぬ兒の、親に後れたる、あるは夫に別れ、兄に離て衛にさまよへるともがら、擧げて數ふるに逞あらざるべし。

之を救ふの方法將たいかにすべき、博愛に富み、慈善を體せる中個社會の力を協せて以て是等の遺族を賑恤するにしく者無からん。

爰に肥前唐津の人奥村五百子、齡耳順に達して、憂國の銳氣燃ゆるが如く、嚮には朝鮮國の衰運を悲しみて之を傍觀するに忍びず、東奔西走して、そが教育の道を開き、今又奮然起

ちて海を渡り、血を踏み、屍を躐え、遠く北清に入りて、親しく戦地の實況と軍隊の勞苦とを視察し、歸るに及びて切に其の遺族救護の良法を講じ、軍人達に後顧の憂ひなからしめ、愈々皇國の光輝を放たしめんとす。女史曰く「願くは君達が半襟一掛の用を節し、その資を積みて之に充てよ」と、眞に適切の言といふべし。われら不敏なりと雖も、均しくこれ女史が同胞姉妹たり、いかで同感同情の熱涙を濺ぎて以つて、女史が希望を助けざるべき。依りて爰に愛國婦人會なるものを設立し、普く有志の諸媛を糾合せんとするに當り、長くも各妃殿下の聞し召す所となりて、漸次御賛同の光榮を給はんとす。希くは世の閨秀たち、吾等が微衷を賢察ありて、賛成助力せられんことを、切望して止まざる所になん。

明治三十四年二月

ついで三月二日、東京の九段借行社で、愛國婦人會々員獎勵會なるものが開催されたが、この時は朝野名士が百六十餘人からも參會した。

先づ下田歌子女史の開會の辭が終ると、五百子が壇上にあらはれた。